魔法少女マニュアル

N.K=かにかま

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法少女の正しい在り方とは？（哲学）

これはそんな疑問と共に突如降りかかった非日常を送ることになった少女たちの物語。

※この作品は小説家になろうの方にも掲載しております。

目次

1. けいやく ―― 1
2. ぞくせい ―― 16
3. じゅんび ―― 28
4. かいこう ―― 44
5. さんにん ―― 55
6. がくさい ―― 69
7. さいかい ―― 89
8. ほうしん ―― 111
9. ちゃかい ―― 124

1．けいやく

「――私と契約して、魔法少女にならないかい？」

そう、これが運命の分岐点。

二頭身くらいの白ウサギがシルクハットを頭にちょこんと乗せてる上に生意気にも二足歩行までしてる。葉巻も吸ってるのが何かムカつく。

そんなウサギがウチに向けてどこにでもありそうなルーズリーフに書き込まれた契約書（誓約書かもしれない）を押し付けてきたこと。

――そこから、全ては始まった。

※

東京目黒にあるこの平凡な公立高校に入学し、ウチは変わった。うざかった中学の連中とは離れ、高校デビューみたいな勢いで髪まで染めてしまった。

周りからはギャルと思われてるみたいだけど、あんなチャラチャラしただけのパリピと一緒にされるなんてごめんだ。

何もないありふれた日常、そんな日々を過ごせることがどれだけ幸せなことか。一年前の冬に起こった皆既月食や、埼玉の方で起こってた集団失踪事件の真相がどこかの教団が原因でその教祖が自首したりだなんてあったし。

うん、やっぱり平和が一番だね。

「ツバキー！食堂行こー！」

「いいよ～、今日の日替わり何かな？」

「ふっふっふっ、今日はステーキ定食だよ！今朝食堂のおばちゃんの友達のおばちゃんに確認してきたから！」

「……　それって両方食堂のおばちゃんじゃないの？」

「あったりー！」

千梅はそう言いながら陽気に笑う。それから相変わらず呪術書を手に持った友人の松子とバイト戦士の三竹が合流し、ウチらは四人で食堂に向かった。

「松子、あんたの恋まだ成就しないの？私としてはそろそろ色々聞きたいんだけ、ど」

「……　まずは恋敵を呪い殺すことから、唐吉様の身の安全の確保が先」

「うっへぇ、相変わらずだねぇ！」

「ねぇ三竹、あんた今日はお金あるの？」

「もちのろんよ！昨日は学校休んでまで稼ぎに行ってたんだから！あ、ツバキ後で昨日

のノート見せて」

「いいよー」

四人で座れる席を見つけて他愛もない女子トークをする。奥の方でまた神城のやつが女の子口説いてる、まずはその体型どうにかすることから始めた方がいいと思う。よくやるよ、本当に何回も。

松子は松子で髪の毛から藁人形まで取り出したし、全くあの馬鹿のどこがいいんだか。

「それで、今日の特ダネは何？千梅ちゃん情報局の局長さん」

「――その言葉待ってたぜ！」

とんこつラーメンをズルズルと吸っていた千梅が突如立ち上がる、いつものことだ。自称情報通の千梅はどこからか毎回役に立つのかわからない情報を仕入れてくる。

それをお昼の食事時に発表するのがウチら四人の中では気がつけば恒例行事となっていた。ちなみに千梅ちゃん情報局とは名ばかりでそんなものは存在しない。

「今日の特ダネは、こちら！」

またどこから取り出したのか、フリップボードが出現する。一体どういう原理なのだろうか、謎だ。

「何々？キリュー先生ついにＢＬに手を出す、ってこれ何？」

「普段はアクションや百合ジャンルを中心としてるイラストレーターにして漫画家のキリュー先生が、だよ！まさかのＢＬ本を出したんだよ！凄くない、これ、天地がひっくり返るほどの特ダネだよ!!」

と、まぁ、いつもこんな感じでよくわからない情報をどこからか持ってくる。一体どこで役立てろと言うのだろうか。

ウチはとりあえずステーキ定食の味噌汁を啜りながら友人を半目で見る。

「あ、あとは、うちの生徒会長様がコスプレイヤーだって噂が」

本当に、いつどこで役に立てろと言うのだろうか。おかしくなったウチは思わず笑ってしまう。千梅は千梅で慌てふためいてる。何か感に触ったと勘違いされたのだろうか？

「‥‥　とりあえず、ラーメン食べたら？伸びてる」

「ぬ？うぁ、はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」

松子の指摘に千梅はさらに慌てふためいた。何だろう、元々落ち着きがないのにここまで取り乱すのにどうやって情報収集とかしてるんだろう？

尾行とかは絶対できなさそうだし、父親が探偵やってるってことにも信憑性がなくなってきたぞ。

気がつけば、三竹は親子丼５杯目に突入していた。

「にしても、毎日平和だね～」
「……　毎日が戦争」
「あっはっは、松子もたまにはリラックスすれば？片想いの相手も明るい子がいいんじゃないかな？」
「……　三竹が言うなら、頑張ってみる」
「ま、待っててねツバキ！今から私がスキャンダル不可避の特ダネを作ってくるから！」
　ふふふ、本当に、ウチはこの時間が大好きだ。この時間がとても愛おしい、いつまでも続いて欲しいと願うばかりである。

※

　そう、このよくわからないウサギに道を塞がれるまではね。
　何？魔法少女？ふざけてんの、あんたの存在が既にふざけてるっていうのに。
「……　あのー、無視はよくないよ？」
「うっさい。悪ふざけに付き合うほどウチは暇じゃないの」
「わ、私は本気だ！」
「どっちにしろ、よくわかんない勧誘に付き合うほどウチは暇じゃないし」
「こ、これだから人の話を聞かないゆとり世代は……　ッ！」

「偏見にも程があるだろ!!」
もう、マジなんなのこのウサギ！
大体、魔法少女ってあれでしょ！魔王とか呼ばれたり、最終的に使い魔が裏切ったり、魔法少女同士が無意味な殺し合いさせられたり、「まじかるー」とか言って死人がゾンビ化したり、ネットで「不幸だねー」とか言われて魔法の能力が与えられたり、ゲームのプレイヤーから選定されて実際になっちゃうけど最終的には誰も生きてないっていうあの胡散臭くて非日常の入り口一歩手前のキチガイ集団達！
「――それは、違うよ！」
「心読むな！」
「魔法少女は、清く正しく美しく、可愛くパンチラがあって皆の夢と希望の存在でなければならないんだッ！」
「何熱弁してんだ!?パンチラは不要だろ！」
「いや、必須要素だ！」
ダメだ、日本語が通じない。今まで会話ができてたのは奇跡だったのだろうか、頭までガンガンしてきた。ていうか、葉巻やめろ。副流煙の影響考えなさい！
人通りの少ない場所と時間だったから良かったものの、これがもっと街の中だったらウチまで変な目で見られてしまう。そうだ、こいつを千梅に献上しよう、珍しいものと

か好きなあいつなら喜びそうだ。あー、でも三竹はいつも腹空かしてるし兄弟も多いから食糧として渡すのもアリか。いやいや、松子たしかウサギを生贄にする呪術の話をしてたような。そうだ、三等分しよう。

「そうだじゃない！何物騒なことを考えてるんだ、君は!?」

「チッ」

　また心読まれたか。

「万が一、私が人間に見つかったら大変なことになりかねない！」

「ウチも人間だけど」

「とにかくだ！君には魔法少女としての素質がある！」

　いや、そんな素質いらねーし！生きてても役に立たないし、数学くらい役に立たない！

「いや、数学は大切だよ」

「あ、そう」

「まぁ、事情もなしに済まないが私にも時間がない。だから、何も疑うことなくこれを受け取って変身してほしい！」

「嫌だ」

「知ってたよ！」

本当、なんなんだこのウサギは一体。わけがわからんぞ。
話は進まないし、ウチは帰れないし！
「とにかく、頼む！変身してください！お願いします、なんでもしますから!!」
「……　ここまで頭下げるやつはじめてだ」
ったく、しょうがないな。どうせハッタリだろ。変身なんて、そんなこと起こるわけないから。
「――――貸せ、一回だけだぞ（ということにしておこう）」
「！か、感謝する！」
そうしてウチは明らかにオモチャの杖を受け取った。うん、トイザ〇スとかで売ってそうだ。
「その、赤いボタンを押してくれ」
ポチッとな。
ウチが赤いボタンを押した瞬間、オモチャが光り始めた。おぉ、中々演出に凝ってるなぁ。
そのまま光はウチを包み込み、今着てる制服を引き剥がす。ウサ耳のついたカチューシャが頭にセットされ髪はツインテール。やたら露出度のあるピンクを基調としたフリフリのドレスに純白のドロワーズ、しかも丸いウサギの尻尾付き、子供らしいブーツ

に白い手袋を身につけて、クルッと一回転って待て待て待てぇい!!
「ふぁ!?」
「うん、やっぱり君には素質があったみたいだね!」
ちょ、え、何これ!?超恥ずいんだけど、肩とか脚とか首元とかめっちゃスースーするし!
「な、何これ!?」
「変身だよ」
「おかしいよね!?」
夢でも見てるのか!?
「……　ていうか、こんな格好人に見られたら――――」
「大丈夫!この近辺の人払は万全さ、通行止めの標識に工事中の看板をあちこちに立てるのは骨が折れたよ」
「そこは魔法じゃねぇのかよ!!」
いかん!魔法少女の存在を受け入れてしまってるウチがいる!
でも、こんな変身させれて疑えって言う方が無理か。実際目の当たりどころか体験させられたし。
「……　そろそろ着替えていい?」

「その前に、私と契約してほしい」
「契約ぅ？」
「私の名前は、時計ウサギ。ある事情があってパートナーを探していた」
　それでウチ、か。ていうか時計ウサギ？
「時計ウサギって、あの？」
「あの時計ウサギだよ」
「え、でもあんた懐中時計持ってなくない？」
　しかも、葉巻まで吸ってるし。
「あぁ、あれは私の亜種のアナログ時計ウサギだね。私はデジタル時計ウサギ」
「ホントだ、ｉ　Ｐａｄ首から提げてる」
　いまいち釈然としないけど、時計ウサギってもっとメルヘンな感じだったような気もする。
「私は、今の魔法少女の状況をよく思っていない」
　聞いてもないのになんか語り始めたぞ、このウサギ。
「魔法少女と聞けば殺し合い、魔法少女と聞けば死亡フラグ、魔法少女と聞けば悲劇モノ。かつて子供達に夢と希望を与えてたあの魔法少女の像は今や変わり果ててしまった、私はそんな流れを変えたくて、そんな世の中を変えたくて、魔法の力を正しく使っ

てほしくて！」
「ウチが犠牲になったと」
「そういう言い方しない!!」
なんか怒られた、すまん。
時計ウサギは本気らしい。涙まで流して、御涙頂戴でも狙っているのだろうか？
「君の名前は？」
「ゴンザレス」
「うん、清々しい嘘をありがとう。改めて、君の名前は？」
「……　椿」
面倒ごとになりそうだから偽名使ったのに、やっぱもっとバレにくい名前にすればよかったかな。
でも、そんなすぐ思いつかないし、もう何より時計ウサギがめんどくさかった。
「ツバキ、君は私のパートナーだ。私は君の使い魔として生きる、だから改めてこの契約書に目を通した上でここに印鑑とサインを入れてくれ」
「随分と現代的だな」
「保険とかもきちんと適用されるから」
まぁ、もう変身しちゃったし。あとで保健所にでも連れて行って対応してもらおう。

「やめて！あそこの料理マズイんだよ!!」
「あ、行ったことあるんだ」
　しかも料理出るのか、なんか意外。すぐに殺処分されるんじゃないんだ、残念。
「あのさ、印鑑家なんだけど」
「お供するよ。私も住み込みで使い魔するわけだし」
　・・・・　逃げれなかった。ていうかコイツ住むのか。人の話聞かないし自分勝手な奴。
とりあえず、食費は増えるな。経費とかで落とせたらたんまり落としてやろう。
　あとは、あの馬鹿のことを何とかする必要もあるな。
「ていうかさ、そろそろ変身解きたいんだけど」
「そこの黄色いボタンで元に戻れるよ」
「じゃあ、この青いボタンは？」
「特に何もない」
　飾りかよ！

※

　ウチの部屋には同居人がいる。従兄弟の唐吉という馬鹿だ。そう、松子が溺愛してるあの馬鹿である。

経緯は面倒だから省くけど、親戚だから仕方なく住まわせてやってるという形に近い。ウチの両親は長期出張でしばらく帰ってこないし、しばらくはあの馬鹿と二人っきりという状況だった。まぁ、厄介なのが増えたけど。

「で、そこに押して、そうそこ！その欄の中に」

「はいはい」

あまり法律詳しくないけど、これ訴えられるんじゃないかな？

強引な押し付け、しかも本人の意思を無視した契約だし。やろうと思えばできそうな気がしてきた、とりあえず保健所に連絡しよう。

「ツバキ、君はどうしてそう私に冷たいんだい？」

「食費が増えるから」

そう、どうやら食費は経費で落とすことができないらしい。時計ウサギの言葉を半信半疑の状態で契約書読み直したら本当にそう書いてあった、解せぬ。

とりあえずこいつはウチの部屋に置いておいたほうがいいな。あいつに見つかったら本気でめんどうなことになっちまうし。

「ツバキ、もう一度変身してくれないか？」

「やだよ、なんで？」

「本部に報告をするため写真が必要なんだ。後々めんどうなことになるからね」

‥‥　こいつはどこの下っ端社員だよ。まぁ、でも、たしかに自分の姿を鏡で見たいってのはあるかな。

　えっと、たしかこのオモチャの赤いボタンを押せばいいんだったね。オモチャから光が放たれる。ていうか、これこの状況であいつが来たら果てしなく恥ずかしい上にめんどうなことになるんじゃ――――

「呼ばれた気がしたッス、ツバキ姉！おかえり!!」

――――やはりこの馬鹿は期待を裏切らない、最悪だ

　この頭悪そうなのがウチの従兄弟なんだから、しかも勝手に舎弟に成り下がってるせいで学校で変な目で見られるから本当にやめてほしい。

「ツバキ、姉‥‥」

「いや、あの、なんというか」

　うん、思ったよりこれは恥ずかしい。ていうか、どうやって言い訳しようかなぁ、本当に。

「その衣装最高ッス！その火照った肌、照れてる顔、若干涙目になってる両目、普段見られないツインテール、しかもウサ耳、極め付けにはどエロいその格好!!写真いいッスか、ていうか許可とかめんどうッス!!撮らせてもらうッス、ゴチになります!!」

「ちょ、馬鹿！どこ撮ってるの!?」

「いやー、このアングル最高ッス！今夜はこれで抜けるッス！最高のオカズッス!!」

パシャパシャ、パシャパシャパシャ！とシャッター音が切れる切れる。ウチの堪忍袋も切れる切れる。

「い、　い、　加　減　に、　し
ろぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

「ご 褒 美、 あぁぁぁぁぁぁ り が と ぉぉぉぉぉぉぉぉお ご ざ い まぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッス!!」

思わず殴ってしまった、うん、後悔はしてない。むしろ清々しい。だってこんな嬉しそうな顔してぶっ倒れてるんだもん、ウチはむしろ称えられてもいい。ていうか、松子は一体こいつのどこに惹かれたのか理解できない。

「……　ツバキ、私も一枚撮らせてもらってもいいかな？」

――――バキッ。

条件反射で時計ウサギのｉ　Ｐａｄを叩き割ったのは悪くない。うん、うちは決して悪くない。

2．ぞくせい

時計ウサギがうちにやって来て三日が経った。結局、住まわせることになったけど食費の問題が解決してない。あのバカには説明する必要はゼロだけど、あの撮られた写真だけは削除しなくちゃいけない。そういう魔法ないのかな？うち、曲がりなりにも魔法少女になったわけだし。

そのことを時計ウサギに相談したところ「そんな魔法ないよ、そもそも魔法といっても今の君に備わってる能力は人並み外れた跳躍能力だけさ」とのこと、ウサギだからなのか？ていうかそれは魔法といっていいのか？

あの時計ウサギの馬鹿が言うには魔法というものは魔法少女本人であるウチとステッキに貯まる経験値と呼ばれるものによって相性のいいものがそのうち目覚めるとか。あとは本人の属性次第らしい。経験値がどうやって貯まるだとかそういう説明は一切ない。ていうか属性って何だ？ウチは火とかを出せばいいってことなのか？この使い魔、本当に使えるのかわからない、ていうか肝心なところで使えない気がしてならない。今は自分の食費は自分で稼ぐとかいって新聞配達に行っている、よく面接通った

な。

　それでウチはいつも通りに学校である。テストも近いから勉強しないといけないし、提出物も溜まってる。魔法少女とか非現実的で全くもって履歴書に書けない経歴が増えてしまったが、今の大切なのはこの現実であり、何気ない日常こそ大切である。

　数学教師が頭痛くなるんじゃないかって数列をチョークでただひたすら書き記してるのをＢＧＭに受ける授業も、昨日も夜勤で疲れて爆睡しているバイト戦士の友人、授業中にも関わらずどこかに電話をかけている友人、黒板の内容を完全無視して藁人形を添えて何かよくわからない文字列を並べる友人、うん、平和だ。

　授業終了のチャイムが鳴り、数学教師が教室から出て行くと日直の神城が板書内容を消していく。男子共が色とりどりのチョークで落書きというなんとも低レベルなこともしているが、ウチには関係ないからいいや。

「いやっほーい！特ダネが私を呼んでる気がするー！」

「ちょ、どこ行くんだよ千梅!?次はセージの社会だぞ!?」

「甘いな助手君よ、そんなもの恐れていては人生負けなのと一緒なのだよ、というわけで隣町まで行ってくる！」

「お前それでこの前反省文書かされたばっかだろうがッ！」

「明日雨らしいよ」

「嘘!?明日五番目の彼氏とデートなのに!?」
「五番目って何!?ねぇねぇ、五番目って何!?」
「騒がしいところだな、ツバキ」
「‥‥　なんでアンタが学校に来てんの？」
「痛い痛い痛い！骨格が変わる、顔が歪む!?」
「どしたのツバキ?なんか妙にハスキーな悲鳴聴こえなかった?」
「そう?ウチには聴こえなかったよ」
　とりあえず口をもしもの時のために持っていたボールギャグで時計ウサギの口を塞いで鞄に押し込む。今日は体育もあったからスペース的に余裕のある体操服やらを詰めた方に。
　眠気眼のバイト戦士こと三竹はシュークリームを頬張りながらふらふらとウチの机にまでやってきた。
「昨日は何してきたの?」
「昨日はね～、夕方ファミレスで二時間と家庭教師を一時間半、それから夜にキャバクラで常連の刑事さんから愚痴を五時間くらい聞かされてた」
「そ、そう」
　色々と言いたいことはあるけど、三竹は割といつもこんな感じである。ちなみに彼女

がバイトをしてる理由は至極単純で食費を賄うためである。兄弟が多いらしく、三竹は上から数えて三番目、それで大食いである彼女は自分の食費を自分で稼いで生活している。

一番上の長男が自宅警備員としての階級はそこそこ高く、以前泥棒が家に入り運悪くその三竹のお兄さんの部屋に入り撃退したとかそういう話があるくらいだ。近所でも有名らしい。

「あんたはもっと自分の体大切にしなよ、働くのも大切だけどさ」

「う～、オカンが『お前がいると食費がタダでさえ高いのに十倍近く高くなる、だから働け！むしろ働いて稼いでください、お願いします』って言ってたからさぁ、迷惑はかけたくない」

うん、親切心がお母さんを傷つけてるような気もするよ。実際その稼ぎは親元には入ってないんだし。全部三竹の胃袋に入るんだからある意味では救いだ。いつの間にか１２個目のシュークリームに突入してるし、左手の残骸を数えたらわかってしまった、あまり知りたくなかった。

【ピピッ、識別魔法を取得可能になりました】

……　疲れてるのかな、また幻聴が聞こえた気がした。この数日で何度目だろう、もう数えるのも面倒になってる。

「どったの？」
「いや、なんでもない」
　13個目のシュークリームを口に運ぶ三竹がこくんと首を傾げる。そうだ、現実逃避ついでに何度か思ったのだがウチの他に魔法少女と呼ばれる存在はいるのだろうか？時計ウサギは黙秘権があるとか彼女らの人生に関与してはいけないとか言ってたけど、あれ、これいるって言ってるみたいなもんじゃね？
　……　盲点だった、じゃなくて、その人達もウチみたいに日常を送ってるんだろうな。ウチが気づかないだけで案外身近にいる可能性だってあり得る。
　そんなことを考え耽っていると休憩時間の終わりを告げるチャイムが鳴り響くと同時に社会のセージに背負われながら千梅が戻ってきた、おかえり。

※

　満月が綺麗な夜、東京の空に一人の魔法少女がビルからビルへ跳ぶ姿が稀に目撃されている。それはツバキが時計ウサギと出会うもう少し前から、噂好きの東京人は都市伝説として二ヶ月ほど騒いだことがあったが、人の噂とは所詮七十二日ともいう。時間の経過と共にそのことは忘れ去られてしまった。
「……」

眠らぬ街と呼ばれてる街にも光が消える時間は必然と訪れる、人間が睡眠と休息を求めている限りは。

そんな街をビルの屋上から見下ろすのは見事なまでの純白の髪を左右に団子結びで結い、ウェイトレスのような装いにふわっと丸くかぼちゃのようなスカート、腰にはコルセットのようなベルトを装着しておりボディラインが特徴的となっている。

衣装のデザインは、全体的に丸みを帯びたものとなっている。ステッキは戦国時代の武士のように腰に差している。魔法少女、桜は赤というよりもピンク色に近い瞳を動かすことなく、その場から移動する。

「……」

「おい、サクラ。そろそろ引き上げた方がいいんじゃないのか?」

「ダメ、あと、スカートの中に入るの禁止」

「そんなこと言ってもよ、俺はパンツの匂いと存在で俺自身の存在を維持してるのであってだな――――」

「それは聞き飽きた、あと、ナキ達に迷惑かけるのもダメ」

「厳しいねぇ、俺のご主人様は」

「……　次、やったら契約なしにする」

「おっと、そいつぁ困る」

失敬、と言いながら桜の追いかける桜の使い魔、ハンプティパンティは自慢の髭を整え、頭に被ったパンツ（サクラの同居人の妹のもの、現役ＪＫ）の調子を整えながら冷や汗を流す。

とは言ったものの、ハンプティパンティの心配事は他にもある。寡黙で表情の変化の少ないサクラは家出少女だ、家庭の事情で深くは詮索していないが余程の事情があったことだろう。そこはいい、彼女ほど魔法少女として自由に動き回りやすい環境のある年頃の少女は少ないだろう。ハンプティパンティも当たりを引いたと思っていたが、実際にやってみるとどうも苦労や胃が痛くなることが増える。ハンプティパンティの今月分の胃薬も底をつきかけている、そろそろ買い足さねばと思っているところでサクラが次のビルに着地する手前で足を踏み外した。

「あ」

「サクラぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」

ひゅーるるるると勢いよく落下するサクラが咄嗟に手を伸ばした先はペンキ塗りたての壁、もちろん掴めはしない。その近くには運悪くペンキ業者の片付け忘れたペンキバケツがあり、サクラはそこに尻から突っ込む羽目となる、しかもその衝撃で即興で組み立てたであろう足場は崩れバケツに入ったままサクラの華奢な体はひゅーるるる

と落下する。
　無駄に頑張って崩れることがなかった部分の足場のパイプがバケツがぶつかり、その衝撃でバケツと共にサクラの体がくるくるくるくると勢い良く回転し始める。ガン、ゴン、バン！とビルの壁に激突を繰り返し、最終的には重力に従いゴミ置場に頭から落下する。ちなみにバケツはまだ抜けないままである。
「……　んぅ」
　ハンプティパンティがサクラの元に辿り着く前にゴミ袋に埋もれたサクラは上体を必死になって起こす。バケツは今までの蓄積された衝撃と重みに耐え切れず、サクラが座り込む形になると同時にバラバラになる。その際中にあるペンキがべたりと辺りに流れる。もちろん、サクラの白を基調とした衣装にも水色のペンキがべったりと付着する。
　ハンプティパンティがやってきたのはサクラが立ち上がってからであった。
「……　毎度のことだけど、大丈夫かい？」
「問題、ない」
「俺の財布は底をつきそうなんだけどねぇ」
　魔法少女の衣装は特別な素材で出来ており、普通のクリーニングや洗濯では汚れを落とすことができない。そのため使い魔が上に頼んで特殊な洗濯をしてもらうのだが、経

費は使い魔持ちとなる。そこは魔法を使うところなんだろうが、そんな便利なほど魔法は発展を遂げていない。

そう、ハンプティパンティにとっての誤解、それはサクラがドジッ娘属性であったことだ。魔法少女使い魔界隈ではドジッ娘は最も金のかかる属性として有名である。財布のためになるべく避けなくてはならない、サクラの様子からそれはないと思ったハンプティパンティの観察不足だった。

「とにかく、今日は一旦帰ろう！それがいいよ！」

「……　仕方ない」

サクラは今夜、大企業会社ワンダーランドの子会社トイ◯ラスから出た不正を暴くために潜入調査をする予定だったのだが、この調子では無理そうだ。まず、大量のゴミ袋をクッションにしてしまったのが原因で異臭がすごい。それでなくてもペンキの匂いもするというのに、これでは潜入前にバレてしまう。

「兄貴、ここです！空から女の子が落ちてきたトコ！」

「うぉ、マジでいるじゃーん！」

「うぃーうぃーうぃー！」

「お前はいい加減日本語を覚えろ！」

面倒ごとというものは連続してやってくるもので、明らかにガラの悪いチンピラ四人

組がサクラの前に現れた。時代錯誤のパンクファッションにモヒカンという男もいれば、チャラ男、学ランを着たいかにも喧嘩番長ですという大男、自分金持ってますぜという明らかな成金の小男となんともまとまりのない四人組だった。
「ヤっちゃってもいいかな？いいよね、いいよ！」
「賛成！」
「ふおーふぉーふぉふぉー！」
「何言ってるかわからねぇ！」
「――やっても、いい？」
「構わないけど、程々にしろよ」
「大丈夫、もしものときはナキがどうにかしてくれるから」
――先に動いたのはサクラだった。
両足に【滑走魔法】を、両手に【プッシャー】と呼ばれる魔法を纏わせた。
【滑走魔法】は単純に速度を上げ、どんな環境下でも動きやすくするというシンプルな魔法で【プッシャー】は触れたものを吹き飛ばすという、とてもシンプルな魔法だ。
サクラはチンピラの群れを吹き飛ばしてさっさと終わらせるつもりだ。
だが、忘れてはならない。サクラの足元にはペンキに散乱したゴミ、そしてサクラの属性がドジッ娘であることを。

ツル、と靴底にあったペンキと地面のペンキが見事な摩擦を発生させ、もう片方の足は小石やゴミに躓き、ビターン！と見事なスライディングをして伸ばされた両手は室外機に触れられる。

そして、サクラの両手には対象を吹き飛ばす【プッシャー】の魔法がかかっている。

結果として、サクラの華奢な両手に触れた四角形の室外機は重力を無視してパイプを引きちぎり、上にある重石ごとチンピラ達に向かって飛んでいった。

「――――え、ちょ、え、えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!?」

「どうなってんだ!!?」

「グルォォォォォォォォォオォォォォォォォォスス!!?」

「そ、それ何語ォォォォォォォォォォォォォォォォォ!!?」

チンピラ達は仲良く室外機の下敷きになった。さらに近くの古ビルの壁が音を立ててガラガラと崩れチンピラ達に追撃を仕掛ける形になった。

「……始末書と後処理、しなきゃな」

ハンプティパンティは軽く溜息を吐いた。また、胃薬が一つ減る。

サクラはゆっくりと立ち上がり、服に着いた埃をパンパンと振り払った。

「……帰る」

「あぁ、うん」

その帰り道に土手で足を踏み外し、片足を突っ込んで抜けなくて四苦八苦して、帰りが遅くなってしまったことは言うまでもない。

――――魔法少女サクラの活躍は後日ニュースで報道されることとなった。

3．じゅんび

――――１０月１８日。

そう、予言の書（学校行事予定表）に記された人類（主に全国の中高生）が危惧する厄災（中間考査）が二日間。

その間に一体何人の人が犠牲になり、生き残った者は何を思うのか。

まさに弱肉強食のような二日間、約束のＸデーまで残り三日にまで迫った１０月１５日のとある高校の一角。

やはり、その一室の様子は死屍累々な地獄絵図と化していた。現実から逃げ惑う者、諦めて現実を受け入れる者、現実を受け止められずパニックに陥る者、そして――――

「ちょっと職員室に行って問題用紙を拝借してくるッスー！」

「頼んだぞ千梅！あんたが頼りだ！」

「情報量は現金、いや、一週間あんたのパシリをしてもいい！」

「頑張れ情報屋！今俺たちに必要なのは戦に勝つための情報だ！」

「――――皆、この戦、勝利を勝ち取ろうぜ！というわけで、行くぜ我が優秀な助手君よ！」

「自分も行くの!?ちょ、引っ張らないで、髪は引っ張らないで！抜ける抜ける抜ける！」

――――いや、お前らまずは勉強しろよ、少しは足掻こうとしろよ。

うん、あまりにも目の前の光景が面白かったから実況をしてしまったけどウチも人のこと言えないね。

友人の千梅はマジで職員室行っちゃったし、今行っても先生達普通にいるから追い出されるがオチな気がするんだよなぁ。

「ねぇ、ツバキ。ここの問題なんだけど――――」

「あぁ、そこはこうして――――」

バイト戦士の三竹もさすがにこの時期ばかりはシフトを減らしたようだ。まだ受験に関わってくるかと言われると微妙だけど、点数は高いほうがいい。

後の補習とか無駄に多い課題をやるよりかは今やっといた方がいい、特に課題なんて先生も見る気なくすくらいの馬鹿みたいな量出されるし、どうせ捨てられるのがオチである。

……　教室から響き渡るチーウーメ！チーウーメ！という謎の合いの手がそろそろ煩わしくなってきた。今が放課後で助かった、帰れる。

ウチは三竹を連れて教室を出た、途中、人間一人くらいのサイズを誇る藁人形を引きずる松子と合流する。相談の結果、三人でファミレスに行くということになった。今日はテストが近いから授業自体は昼前に終わる。

理科準備室の死角のあることで有名な曲がり角を曲がると腹のところに何かぶつかったような、ぼふっという衝撃が走った。
「あ、ごめん！」
「……　気をつけろよ、目どこに付けてんだよ」
……　何とも愛想のないチビガキであった。紫色の髪が目立つからもう忘れることはないだろう、次会ったら覚えてろよ。ていうかせめて謝って行けって話だよ。
「ねえ、あんな人同級生にいたっけ？」
「さぁ、もしかしたら先輩かもね。それか三竹の場合学校来てる頻度少ないから覚えてないんじゃないの？」
「失礼な！辛うじてクラスメイトの顔はわかるよ！」
「辛うじてなんだ」
でも、たしかにウチも見たことない気がする。一応うちの高校の制服着てたけど、あんな人いたっけな？
それに学校内なのに帽子を被ってたのもなんでだろ、しかも結構目深めの。
考えても仕方ない、ウチら三人は学校を出て近くのファミレスに寄った。ちなみに三竹のバイト先の一つでもある。食事と勉強、他愛のない雑談で１６時までゆったりと過ごした。

「……　ねぇ、寄りたいところあるんだけど寄っていい？」
「いいけど、珍しいね。松子がそんなこと言うなんて」
「……　外せない用事だからね、あの人のためにも私自身のためにも」
　松子の案内でやってきたのは大鳥神社という神社だった。駅からもそこそこ近くて、住宅街にもあるからお参りに来る人もよくいる。そこに彼女が信頼を置いている占い師がいるらしい、ウチの本音としてはちょっと怖い、色んな意味で。
「……　も、もしかしてあの鳥居のところにいるおっちゃん？あれってホームレスってやつだよね？」
「……　そう、留楠さんって言うの。……　よく藁人形を売ってくれる」
「騙されてるよ松子ちゃん！お金はよく考えてから使って!!」
　バイト戦士からのありがたいお言葉！しかし、あんたも人のことを言うことはできない！
　でも、見た目からしてかなり怪しい。そこらのホームレスと見た目は変わらないものの占い師であるというところが物凄く胡散臭い。水晶玉は持ってるけど、それだけで占い師と信じるのは如何なるものか。
「……　こんちは、留楠さん」
「おぉ、いらっしゃい松子ちゃん。今日は占いかい、それとも藁人形か呪詛か護符、釘、

髪の毛、河童の腕、オーパーツ、パワーストーンかい？」
「……　占い、テストの必勝祈願といつものあれ」
「ほいほい、後ろのお友達も一緒にどうだい？」
　――見つかった、このままスルーしてくれると思ってたのに。
【たんたんたらら、危険予測を取得可能になりました】
　……　こんなときにまで幻聴が、毎回思ってるけど、毎度微妙にメロディ違うんだよね、統一しろよ。
「……　どうしたの二人共？」
「いや、何でも」
　とりあえず行くから藁人形出すのはやめてもらいたい。水晶玉を持って胡座をかいてる留楠さんもニッコリと微笑みかけてきてるし。
　意を決してウチと三竹はせっかく取っていた距離を縮めていくことにした。
「はじめまして、まさか松子ちゃんが友達を連れてくるなんて思いもしなかったよ」
「初めまして、三竹と申します」
　おぉ、これがバイト戦士の特技【営業スマイル】か！
　さすが、食欲を満たすためにいくつものバイトを掛け持ちしてるだけある！
「ツバキです」

「……　ほう」
　留楠さんから、笑みが消えた。
　何で!?もしかして、初対面じゃないとか？
「……　どこかでお会いしました？」
「いや、そういうわけでは、なるほどなるほど」
　なんか勝手に納得されて釈然としないけど、追求したらダメな気がする。後が怖い。
「では、ツバキさんからどうですかな？」
「ウチ、ですか」
　……　なんか断るに断れない状態だし、せっかくなのでお願いすることにした。胡散臭いけど、お金はいらないっていうし。もしこれで料金を求めてきたのならその水晶玉カチ割っても良かった。
「ふむ、どうやら数奇な運命を辿るようですな。この影は、ウサギ？」
　――――すごい、あまり嬉しくないけど当たってる。現在進行形で数奇な運命を辿ってるし、そのウサギには大変心当たりがある。
「まぁ、あまり気負いなさらず」
「は、はぁ」
　適当なアドバイスだなぁ、まぁ、変に魔法少女とかのことを口にするわけにもいかな

いからウチとしては良かったのかも。
「じゃあ、次は松子ちゃん」
「えー、私は？」
「三竹ちゃんは最後ね、松子ちゃんのは時間を設定しないと効果が現れないタイプだから、そろそろその指定の時間だし」
　‥‥‥　それは一体どんな占いなんだとツッコミたかったが、不用意にツッコむのは野暮だろう。
　留楠さんは慣れた手つきで水晶玉を傍に置いて、大量の割り箸を取り出す。その水晶玉は使わないんですね。
「まずはいつも通り、松子ちゃん。想い人との相性からでいいかな？」
「‥‥‥　お願いします」
　――――今まで見たことないくらい真剣な表情をした松子が頷く。張り詰めた空気がピリピリと伝わってくる。
　ウチは思わずゴクリと息を呑んでしまう、だけどこれから行われるのが占いであることを忘れてはならない。
「ミエル、ミエルゾ！カノモノガコノキンペンニイルビジョンガ!!」
「――――よし、行こう！」

「割り箸使ってないじゃん！って松子ちゃん腕引っ張らないでぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ、私まだ占ってもらっ　え　な
いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!?」
ちょ、ウチも!? なんでこんなときだけ無駄に力強いのおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお――――!!?
――その後、松子がひたすら走り回った挙句、ウチらが解放されたのは三時間後の出来事だった。

※

松子の想い人である唐吉は実の従姉であるツバキを溺愛している、敬愛もしている。壁一面にはブロマイドを貼り巡らし、床にもツバキの視線を、もちろん天井からも見下された表情を拝むことができる、我々の業界ではご褒美です。
そして神棚にはツバキの等身大の偶像を設置し毎朝決まった時刻に祈りを捧げている。同居人であるツバキに想いを伝えるために、自分の存在を少しでも身近に感じてもらうために彼は努力を惜しまない男である。
最近ツバキの飼い始めた妙に人間味のあるウサギもツバキが連れてきたという理由

であまり気に留めたこともない。彼女が連れてきたのだから、それでいいという認識だ。

ツバキの等身大の抱き枕を傍に置き、ベッドから起き上がる。そろそろ待ち合わせの時間だから出かけるだけだ、特に深い意味はない。ちなみに唐吉の学校は今日は創立記念日でお休みである。

自転車で出かけるような距離でもないため街をゆっくりと歩くことにした。

元々隣町で住んでいたのだが、親に頼み込んでツバキとの同棲を許可してもらった。その際に色んなこともしたのだが、あえて省略させてもらおう。人生知らない方が幸せなことだってあるし、話すほどのことではない。さて、まっすぐ行こうか、友人である柿也のところへ行こうか。

とりあえずコンビニで軽く食事を済ませることにした。このコンビニはツバキがよく行くことは調査済みである。もしかしたらいるかもしれないという淡い期待を抱いたが、叶うことはなかった。代わりに刑事さんのような人が複数いた、何か事件でもあったのだろうかもしれないが、唐吉には関係のないことである。

のんびりと歩きながら目的地である大鳥神社に辿り着いた。まだ夏の暑さが少し残ってる夕暮れではあるが、参拝者はいるレベルである。

日はほぼ沈んでいる、唐吉は境内には目を向けることなく鳥居の下にダンボールを敷

いて不気味な雰囲気を漂わせてる男の元へと足を進めた。
「どもッス、留楠さん。商売どんな感じッスか？」
「唐吉君か、相変わらずだよ。常連さんしか話しかけてくれない」
「ハハッ、そうみたいッスね！」
――――留楠は怪しげな笑みを浮かべる。
こんな不気味な男の元へ足を運ぶなど常連でなければ余程の物好きくらいである。
「それで、君はツバキちゃんに想いを告げることができそうなのかい？」
「んー、まだまだってところッスね。正直最近避けられてる気もありますから」
「そうかそうか、だけど、避けられてるってことはツバキちゃんが君の一面を知っているということだよ。そこを理解してるってことは脈はある」
「なるほど、俺の一面を知ってもらってるだけマシってことッスね！」
「そういうことさ、君はありのままの自分でいればいい」
「へへ、そうッスか」
恋する青年、唐吉の青春はまだ始まったばかりである。もう何冊目になるかわからないツバキとのことを書き記した日記を今日も更新せねばならない。
最初は留楠には色んなことを占ってもらっていたが、最近ではこういう雑談から悩みを聞いてもらうことが多くなった。留楠としても話し相手がいて助かるという形で互

いにｗｉｎ―ｗｉｎの関係が築けている。

「――――留楠さん、ホントいつもありがとうございます！俺、自信持てそうッス！」

「それは良かった、また恋に悩んだらいつでもおいで」

唐吉はこの日、あまりにも上機嫌な故にツバキに晩飯時に心配されたがそれはそれでまた一歩前進したと捉えた。

ちなみにその時の表情はしっかりと記憶に刻みつけ、忘れぬうちに紙に描き記した。

※

翌日、１０月１６日。

奈樹という名前の刑事がいつもと変わらず笑顔を浮かべながら頭を抱えていた。理由はもちろんいくつかあるが、主に実妹の破天荒っぷりと居候のことである、それもいつものことである。

今回はどちらでもなく、昨日の聞き込み中に警察手帳をどこかに落としてしまったせいで捜査から外されたなんて恥ずかしくてとてもではないが誰にも言えない状況に笑っていた。

いやぁ、まさかこんなところでドジをするなんて思いもしなかったと奈樹は先日辿った道を記憶を頼りに再度辿っている。解雇一歩手前の状況で笑ってられるのもこの男

の芯の強さか、はたまた本当に馬鹿なのか定かではない。
夕方、女子高生三人組とぶつかってしまった交差点が一番怪しいと思い現地へ赴くのであった。

※

「……」
「そんな深刻な顔をしてどうしたんだ?·相談に乗るよ」
「いや、ウサギに相談したところで、ていうか誰かに相談したところで解決することじゃなさそうだし、いいわ」
――なんで、ウチのポケットから誰かもわからない警察手帳が出てくるの?
もしかしてあの時か、松子に連れまわされてた時に長身の男の人とぶつかった時落としたと思って拾った生徒手帳だと思ったものがこの警察手帳だったの?
ていうことはあの人刑事さん?
どうしよ、これ交番に届けていいものなのかな?·ていうかそもそもウチの生徒手帳は、あ、普通に鞄に入ってる。落とそうと思っても落とせない場所に入ってる。
せっかくの休日だからテスト勉強でもしようと思ってたのに、気が気でなくなってしまった、本当にどうしよ。

「……　本人に届けた方がいい、よね？」
「何のことかよくわからないが、こういう時こそ使ってよ魔法」
「えー、また変身するの？」
「いや、変身してよ。お願いだから、あれ以来一回もしてないじゃん」
……　時計ウサギと出会って必要な書類とやらを作ってから、ウチは一度も変身してない。当たり前だ。
魔法も一々変身しないと使えないらしいし、その上使えるようで使えない魔法しかない。ていうか実質使えない。
あと、唐吉の馬鹿がうるさい。魔法少女の正体に守秘義務とかはないらしいけど、うざい。
何でかあいつは時計ウサギのことをすんなり受け入れてるし、やはり馬鹿なのか。
「ていうかさ、ウチが変身するメリットってあるの？」
「あるさ、魔法少女として変身することは必要なことだよ。私の面子にも関わってくるし」
「なら、必要ないか」
「人の話聞いてた？」
いや、だってねぇ。あんなフリフリで露出度の高いのを一々着たいなんて思いません

よ。しかも髪型まで変えさせられて、恥ずかしいったらありゃしない。アキバにでも行ってろって話だよ。

「とにかく、これを本人に届けるだけでわざわざ変身するまでもないよ。ウチだけでも十分だし」

「……　変身すれば身体能力底上げだよ？」

「電車使えばいいし」

「……　変身すれば探し人を特定できるよ？」

「名前も顔写真もあるし、もしものときは交番に渡せばいいし」

「……　どうしても変身してくれないの？」

「しない」

だって、あんな格好でウロウロすんの恥ずかしいじゃん。もし友達とか知り合いに見られたらどうしてくれよう。

そもそも好き好んで変身する方が珍しいのではないだろうか。

今日はあいにくの雨だ、正直外に出る気は出ないけど、これ持っててもウチも困るからね。

「……　雨かぁ」

「雨避けの魔法ならあるよ？」

「……　しつこいなぁ、ていうかそんなのあるんだ」
「【水魔法】と【危険予測】があればできるよ」
なるほどねぇ、そんなに変身させたいのか。
「……　一応両方は揃ってるっぽいけど」
だけど、ここで心を折って変身してしまえばこいつの思うツボみたいで何か嫌だな。
でも、傘は今唐吉の阿呆が持って行ってるせいでない。
……　急ぎの用、だから。仕方ないか。
「……　今回だけ、ね」
――――時計ウサギにアイアンクローをした後、誰にも見られてないことを確認し、部屋に潜んでるかもしれない唐吉への警戒を済ませ、部屋に仕込まれていた監視カメラを全部撤去した後、センサーの類も全て取り壊しわしてから仕方なくステッキを手に取り変身した。
……　スカートも胸元もお腹も首元もスースーするから慣れないのよね、ホント。ツインテールってだけでも恥ずかしいのに、極めつけはバニー、死にたい。
それで、この自称ウチの使い魔が言うには水道で水で手を洗った時に身についた【水魔法】と昨日留楠さんのところで身についた【危険予測】の二つを応用して雨避けができる、と。

【水避難】か、うん、雨がウチを避けてあらぬ方向に飛んで行ってるよ。ありえない角度で。雨宿りしてる人、ホントにすみません、制御できないんです。しかもこの魔法発動中はステッキを手に持っておかないといけないのが辛い。

最初から使える【跳躍魔法】を使って屋根から屋根へと移動する、気分はニンジャーだ。ただし、結構人の目が辛いけど。雨だから注目を浴びるのが少なくて良かった。それでも写メとか撮られるのは辛い。

「さて、まずはどこを探すんだい？」

「なんでついてきてんの？」

「使い魔だからね！」

――――ハァ、魔法少女も楽じゃない。

4．かいこう

多分この辺だった気がする。大鳥神社は近いけど、これといって特徴のない住宅街だったせいか記憶がすごく曖昧だ。それに、松子が物凄い勢いで連れ回してくれたお陰もあってか、道を確認する暇もなかった。

雨はまだ降り続いてる。それでも人が行き交うため中々物陰から出ることができない。同校の制服を着た人もいるし、こんなフリフリした衣装を着たウチが出たら大騒ぎになりかねない、主に千梅が大騒ぎにしそうだ。ドロワーズも変なところで通気性があるからスカートを履いてるみたいにスースーする。【水避難】の魔法を使ってるからこのトイ〇ラスに売ってるようなデザインのステッキも右手に握りしめてる状態だ、恥ずかしいことこの上ない。

変身を解いて行くのも考えたけど、それだと魔法が使えなくなってしまう。つまり、雨に濡れる。傘でも持ってたら行けたんだけどね。

……　一番の問題はわざわざウチが来たとはいえ落とした相手がこの交差点に絶対にやってくる保証はない。寒さは感じない、でも路地裏はあまり心地のいいものではな

い。テスト勉強もしたいから、長居はしたくない。もう最悪の場合は時計ウサギか唐吉の馬鹿に任せたい。責任転嫁？押し付け？パシリ？いいえ、適材適所です。

「ツバキツバキ、一体いつまで待つつもりだい？」

「そうね。一時間ここで張って来なかったらあんたに任せることにするわ」

「‥‥　私はあまり人前に姿を出したくないんだが、こんな見た目だし」

「たかが二頭身か五、六頭身かの違いでしょ？大丈夫、問題ない」

「大ありだよ!?」

まぁ、コイツが無理ならあの馬鹿に任せるか。とりあえず自分で言ったからにはここで一時間待つことにしよう。

それで来なかったら帰る、それでウチはこの件から手を引く。うん、それがいいそうしよう。

改めて警察手帳の写真を確認してみる、髪の色は白か灰、光の当たり加減によっては銀色にも見える。ハーフかクォーターか、純日本人ではなさそうだ。苗字はよくある漢字二文字でクラスメイトにもいる。名前の方は少し変わってるくらいだ。若い男性でどこか不思議な雰囲気を漂わせてる。刑事というよりは俳優にいそうな整った美形の顔立ちをしている。某ハイスピード推理ゲームのキャラクターを描いてる絵師の小松○類さんの描くキャラクターに似た雰囲気を感じる。

中学の頃にいたゲーム好きな友人、高松靖人から語られた役に立つかわからないような知識がこんなところで役に立つ、立った、のか？とりあえず警察手帳は一旦しまっておこう、濡れる。

雨は止むどころか、さらに勢いを増してきた。一時間経つまでまだ後４０分以上もある、人も少なくなってきた。

それに傘や合羽のせいで道行く人達の顔をうまく確認することができない。

早いけど、そろそろ切り上げようかなぁ、なんて思ってたらウチの後ろから一本の影が。ウチがしゃがんでるから影が出現したことはすぐにわかった。

――そこには、全身泥と生ゴミを被った異臭を放つ女の人がいた。

「……」

「……」

沈黙。

何と言えばいいのだろうか、というか理解が追いつかない。

目の前の頭の上に泥のついた髪で作った二つのお団子に魚の骨やら何か言葉では言い表すことのできない物体を付けた女の人はこちらをじっと見つめている。何かを訴えかけるようにこちらから視線を外そうとしない。

――体感にして約五分ちょっとが経過し、お団子ヘアの女性が初めて口を開いた。

「……　して」
「え？」
「返して、それがないと、ナキ、困る」
　ナキ、警察手帳に書かれた名前と同じ名前。もしかして、この人は関係者なのかもしれない。
　でも、本人に手渡さなくて大丈夫なのかな？特にこんな大切なものを、本当に関係者かどうかわからないし。
「え、えっと……」
「お願い。それがないと、ナキ仕事できない」
「……」
「君が、さっきナキの警察手帳拾ってるの、見た。返して」
　拾ったのはさっきじゃないけど、仕舞ったのを見られたのか。何だろう、何だか有無を言わせないような威圧感を感じる。言葉もどんどん強くなってきてる。時計ウサギは？さっきまで一緒にいたのに見当たらない!?
「――返して」
「……　わ、わかった」
　冷や汗が止まらない、思わずわかったと言ってしまった。

「良かった、乱暴せずに済んだ」
　警察手帳を受け取った女は口一文字から笑顔に変わった。そのはにかんだ表情がさっきの雰囲気から一変したことに恐怖を覚えてしまった。
「――――君が抵抗してきたら、その服を剥いでぺろぺろして脇汗をなめなめしてからゆっくりと気持ちよくしてあげようと思ってたから、少し残念」
「ひ!?」
　――――訂正、さっきよりも圧倒的な恐ろしさを感じてた。
　そのまま女の人は何も言わずにジャンプして屋根に頭をぶつけてコンクリと派手にキスをしてから、ゆっくりと立ち上がり雨に打たれながらどこかへと行ってしまった。
　ていうか、さっき倒れた時女の人のスカートの中で何か丸いものがもぞもぞしてた気がするけど、気のせいだよね？うん、気のせいだ。
　‥‥‥　それで、えっと、一応目的は果たしたし帰ってもいいよね？
　いつまでもここにいるわけにもいかないし、そういえばさっき時計ウサギがいなかったような‥‥
「ふう、雨足が強くなってきたな」
　――――何事もなかったかのように現れたぞ、この兎肉。今晩のオカズにしてやろうか。

「あんた、今までどこに・・・ ?」
「警察手帳の持ち主がいないかもう少し表に出て探してたんだ。結局現れなかったけどね、まだ待つのかい?」
「いや、帰るよ。あんたがどっか行ってる間に持ち主こっちに来たし」
正確には本人じゃないけどね、面倒だし言っても変わることじゃないから言うことでもないっしょ。
「・・・・・・・」
「ん、どうしたの?」
「・・・・ いや、何でもない」
珍しく悩んだ表情を見せた時計ウサギと仕方なく一緒に部屋に戻った。
部屋に戻り、あの馬鹿が戻ってないことと監視カメラとボイスレコーダーが再び仕掛けられてないことを入念に確認してから変身を解く。
【パラリラパラリラ、警戒魔法と第六感が取得可能になりました】
ふぅ、やっぱりあのフリフリの服は慣れないや。まぁ、滅多に着ることもないし昔は憧れてたから内心ウキウキしてるけど、女の子だし。時計ウサギとか周りには口が裂けても天地がひっくり返っても万が一にもウチが唐吉にベタ惚れすることがあっても言うことはないだろう。

とにかく勉強だ、三日後にはテストが迫ってる。

※

テスト一日目、二日目と全てのテストが終了した。え、ダイジェストにするなって？じゃあ何、問題一問一問紹介すりゃいいの？

見たら頭が痛くなるような問題を見たいっていうの？

ウチは嫌だからね、テスト終わった後の生徒集会で帰れないってだけで既に頭が痛いっていうのにこれ以上痛めるのは嫌だからね。

「はー、だるい」

「……　眠い」

「困るよね、こういうのは事前に言っといてくれないと。早くしないと期間限定の牛豚丼が売り切れちゃうよ～」

「フフ、私は既に本日生徒集会が行われるという情報は入手してましたけどね！」

「だったら教えろやァ！」

「ちょ、まっ、バイト戦士さんがまさかのご乱心!?」

……　もう、目を当てるのもめんどいや。あ、生徒会長さん出てきた。相変わらず美人さんだこと。

三つ編みにメガネは本当よく似合ってらっしゃる、しかもウチらと同学年っていうのがねぇ、隣のクラスだし。喋ったことないけど。

千梅と三竹が何やら争ってるのそっちのけで生徒集会を進めるスルー力よ、こいつら結構騒いでるのに。他でもちらほらと話し声は聞こえてなお透き通るような声、惚れ惚れするよ。

――でも、生徒会長として、というよりも普通にうるさいから注意した方がいいとウチは思うよ?

「あー、終わった終わった!」

「じゃ、私は千梅ちゃんの奢りで牛豚丼を食べに行ってくるよ〜」

「うう、わだじの、わだじの樋口さんがぁー」

生徒集会は思ったよりも早く終わった、近くに不審者が現れたので注意することと二週間後に控えた学祭に関係することだったので生徒たちもやる気になり、最初の不満はなくなってた。

生徒会長、恐るべき手腕!

三竹に引きずられながら千梅は退場したので、ウチと松子が二人きりになった。

「じゃ、ウチらも帰ろうか」

「……ごめん、ちょっと図書館に用事がある」

「そうなんだ、それじゃまた明日！」
「……　うん」
松子と別れてウチは教室を出る。
正直松子が唐吉のことを好きって聞いたときから中々話しにくくなってた時期があったけど、ウチが唐吉と従姉弟であるということは何故か知られてないと知ってからは心がちょっと軽くなってる。そもそも二人はどういう出会いをして松子があの馬鹿を心酔するようになったのかは本当にわからない、うん謎だ。千梅は頼りにならない情報しか持ってこないから聞いても無駄だろうし、この前なんか渋谷の街に飛ぶエイリアン少女が現れただの、どこぞの宗教家が大企業に喧嘩を売っただのと頓珍漢なものばかりだ。
掲示板を確認してから、トイレに行ってから帰るか。花を摘み手を洗ってトイレを出ると、この間ぶつかった深い帽子を被った紫髪の小柄な男が前を過ぎった。
やっぱり見たことない。あんな小さな少年のような生徒はこの学校で見たことない。ちょっと、後をつけてみよう、どこに向かうのか気になる。ていうかここの生徒じゃないなら何でここにいるの？
今日が最終日とはいえ、テスト期間中に部外者が歩き回るなんて。部活動の可能性も考えたが、それにしては迷いがなさすぎる。この校舎の構造に慣れてる。何度も来たこ

とある証拠だ、それに部活なら大抵決まった場所にしか行かない。歩き回るなんて不自然すぎる、彼は校舎のあちこちを休むことなく１０分近く歩き続けてる。

そして、最後に辿り着いたのは生徒会室、前回と同じだ。

前回も行き止まりの場所に位置する生徒会室のところへ向かったのだ。生徒会の関係者なら問題ないんだろうけど、それでも気になるものは気になる。

ゴクリ、と固唾を飲み込み今まで行ったことのなかった生徒会室に近づく。

時間はまだ早い。

テスト最終日で部活をする生徒以外は午前で帰宅している。人気も少ない、目の前の生徒会室からは話し声が聞こえる。ギリギリまで近づいて、息を潜めて中から聞こえる声を聞くために耳をドアのギリギリにまで近づける。

「も―、また――をウロ――――たの？」

「う――――な、別に――――。――――よ」

「それ――――こで大――――くれな――――るの！――――説明する―も大――――だ――――ね！」

生徒会さんと、誰だろう？ちょっと高めの男の声、さっきの小さい子かな？

【ピーガガガ、ピーヒャララ、ピー、地獄耳を取得可能になりました】

会話も途切れ途切れで聞こえにくいなぁ、それに今の幻聴のせいで余計に聞き取りに

くいし。不意打ちにこれはやめて欲しいよ。
「……　楓」
「ど――の？」
「気を――ろ、今――――女の――が――た」
「……　何――って？」
「――魔法少女が近くにいるぞ、それもかなり近い」

5．さんにん

「――――えっと、二人共？な、仲良く、ね……？」
「「誰がこんな奴と!?」」
なんでウチがこんな生意気なクソガキと仲良くしなくちゃいけないの!?
眼鏡をかけた生徒会長は両肩にかけた大きな三つ編みを握りしめながらウチらを宥めるようにしてるけど、この、クソガキとは、仲良くなれない、気が、します!!
「楓、やっぱりこいつの記憶を消そう！早くステッキの用意を！」
「で、でもそんなことに魔法を使うなんて……」
「前体重を減らすために変身した楓にどうこう言う資格はないだろ！」
「ひう!?そ、それ内緒！」
紫髪のクソガキは頭上の耳をぴょこぴょこさせながらウチのことを睨みつけてくる。
――――ん、ちょっと待って？何か端々に気になる単語がちらほらと。
「もう、チェシャ猫は節操ないんだから！そんなんだからモテないんだよ！」
「ふん、この程度で愛想を尽かされるくらいなら、僕の見当違いだったということさ」
「まったく、可愛くないんだから！」

……　そもそもがおかしかった。どうしてウチが生徒会室の前で聞き耳を立ててのがバレたのだろう。

この二人は途中まで気がついてなかった、絶対ではないけど音もウチは立てなかった自信だってある。なのに、何のきっかけもなくバレた。

いきなり扉が開いて、このチェシャ猫と呼ばれてるガキに中に連れられた。そこにいたのは生徒会長とチェシャ猫だけ。

――ていうか、魔法？ステッキ？

「ねぇ、まさか生徒会長も、魔法少女だったりします？」

「そーだよ」

――あっさりと返ってきた。

バラバラになっていたパズルのピースを組む動作に入る前に先に答えを言われてしまったかのような感覚。

魔法少女に守秘義務はないって時計ウサギは言ってたけど、ここまであっさりとバラしてしまってもいいんだろうか？

「私は魔法少女でーす！キラッ☆」と現役女子高生が堂々と言っているようなものだ。恥ずかしいことこの上ない。

「あなたも、魔法少女なんでしょ？使い魔は一緒じゃないの？」

「家に置いてきました」
「あ、哀れな」
　チェシャ猫がドン引きしてる、何で？
「うわぁ、本当にいたんだ！私以外にも魔法少女、嬉しいなぁ、しかも同じ高校にだなんて！」
「だから言ってただろ。魔法少女は結構あちこちにいるって」
「ごめんって、拗ねないで。今夜秋刀魚の塩焼き買ってあげるから！」
「……　うん」
　……，仲良いんだなぁ、この二人。まるで姉弟みたいだ。
　耳をピコピコさせてるチェシャ猫はどこか愛嬌を感じさせられる気がしたけど、気のせいということにしておこう。
「よし、せっかく誰もいないし変身しちゃおうかな！」
「え!?」
「ええ、ウチいるんですけど!?」
「あ、そだったね」
　いやー、うっかりうっかりと生徒会長は頭を掻いてる。
「まぁ、でも君も魔法少女みたいだしノーカンノーカン。いいでしょ、チェシャ猫？」

「いいよ、ちょっと本部に掛け合って人払いするから待ってね」
「……　やっぱ人力なんだ」
　チェシャ猫がガラケータイプの携帯電話を操作する。
　外を見てみると学校近辺の道に立ち入り禁止の標識等が各所に設置され、校内放送で害虫駆除のため残ってる生徒は帰宅するようにと放送が流れた。
　……　いや、毎度思うけどこういうときこそ魔法でどうにかすべきだと思う。
「もう、いつもここまでしなくてもいいのに」
「するさ、楓のコスチュームは目の当てどころがない」
　生徒会長から目を逸らすチェシャ猫を無視して先輩はステッキのボタンを押す。
　――周囲に水色の光が包み込み、光が生徒会長の制服を巻き込み形状が変化していく。肩にかかってた三つ編みは後ろ髪両サイドに再び三つ編みに編み込まれ、脚部にフリルのついた黒いラバー状のレオタード姿になる。さらに白く透明度の高いレインコートのようなマントを纏い、猫耳と猫の尻尾が装着される。
　――変身を終えた生徒会長はくるっとターンを決め、眼鏡の上からウィンクに右手でピースサインを作る。
「……」
「い、いぇい！」

「無理しなくてもいいんですよ!?」
沈黙に耐えきれなくなった生徒会長が声を出したが、どこか恥ずかしそうで声が綺麗に裏返った。
ていうか、コスチュームがどこからどう見てもスク水にしか見えない。
胸も、結構デカイし、レインコートがなければ破廉恥すぎることに、いや、レインコートがむしろ余計破廉恥に見せているのかもしれない。
「――――改めて、私は楓。この高校の生徒会長で魔法少女よ。この子は私の使い魔のチェシャ猫」
「まぁ、よろしく」
「あ、つ、ツバキです。ウチも魔法少女、です?」
なんとなく認めるのは嫌だったが、他に名乗る肩書きもないので名乗っただけである。なかったらなんか寂しいし。
「それで君は変身しないの?」
「え?」
やっぱり、変身しなきゃ、ダメですかね?
一応ステッキはあるものの、何かと恥ずかしい気持ちはある。まだ慣れない。けど、生徒会長は変身したわけだし、ウチも変身するのが礼儀、なのかな?

「早くしなよ」
イラッ、このクソガキ！
ええい、ままよ!!
――ステッキのボタンをやけくそ気味に押した。
ウチの周囲に光が舞い、衣服を脱がしてあのコスチュームに着せ替えられていく。
あー、やっぱ色んな所すーすーする。それに何より…
「……　うぅ、やっぱ恥ずかしい」
「いいじゃん！似合ってるよ、ウサギ耳！」
「ど、どうも」
猫耳の生徒会長に言われても、なんか、辛いです。
「ツバキちゃんって魔法少女になってどのくらい経つの？」
「ええっと、大体一カ月くらいですかね？」
「そうなんだ！じゃあ、新人さんなんだね！」
「は、はぁ」
やけにテンション高いな、生徒会長。ていうか、変身しっぱなで話するの精神的に結構くるのがあるんですけど。
でも、生徒会長もそのままだし戻るタイミングもないからいいか、諦めよう。

「えっと、生徒会長は？」
「楓でいいよ。私はねー、今年で二年目くらい」
　ぶいぶい、と生徒会長は左の人差し指と中指を立てる。二年かぁ、ということは結構前から魔法少女って色んな所にいたんだなぁ。
「ねぇ、他に聞きたいこととかある？私とチェシャ猫が教えてあげるよ」
「おい、なんで僕が巻き込まれてるんだ？」
　目のやり場に困ってるのか、チェシャ猫はさっきからこっちを見ようとしない。聞きたいことかぁ、結構あるけどまずはやっぱりあれかな。
「どうして、ウチがこの部屋の前にいるってわかったんですか？」
　そう、これである。
「あぁ、なるほどね！たしかに気になるよね。でも、わかったのは私じゃなくてチェシャ猫なんだよ」
「え？」
「魔女の声って言葉は知ってる？」
「し、知らない」
「・・・・　君、もっと使い魔と会話した方がいいよ」
　まったくだ。

「君が魔法を手に入れる時、頭の中に声が響くでしょ？」
「あの、電子音みたいな声？」
「そう、それが魔女の声。僕たち使い魔もそれを聞くことができるんだ。自分が使える魔法少女以外に発せられた魔女の声でも、ね」
「あ」
　――そういえば、この部屋の前であの声を聞いた気がする。
「・・・・　本当に知らなかったんだ」
　ということは、もしかして時計ウサギはチェシャ猫の言ったこと、いや、他にも何か知っていることがあるってこと？
　魔法少女なんて現実味ないことだから意識的に避けてたけど・・・
「大丈夫だよ、ツバキちゃん！私も最初のうちはそんなんだったから、チェシャ猫もまともに目を見て話してくれなかったんだもん！」
「そ、それは、だな！」
「にやにや」
「生暖かい目線ヤメロー！」
　なるほど、チェシャ猫は見た目通り初心なんだな。うんうん。
「あれ、そういえばこのコスチュームって使い魔がデザインしたものじゃないの？」

「違うよ、僕にそんなことできるんならもっと目のやり場に困らないコスチュームを申請してるよ！」

そうなんだ、これはてっきり時計ウサギの変態の趣味だと思ってた。

【うほほーい、疑惑魔法が取得可能になりました】

「あ、魔女の声！どっち？」

「今のはウチ」

「本当に魔法が取得可能になる条件とかタイミングってわからないわよねぇ、何が取得可能になったの？」

「疑惑魔法」

「何それ」

「わかりません」

生徒会長につられてウチも笑った。何だろう、この人といると楽しい気がする。

同じ境遇の立場の人に会えたから？

相手が先輩で生徒会長だから？

いや、違う。松子や千梅、三竹といるときと同じような楽しさ。ウチはこの人と友達になりたいんだ。

「――――楓先輩」

「なーに？ていうか楓でいいよー、もう！」
「そういうわけにはいきませんよ。先輩なんですから！というわけで友達になりましょう！」
「ふふ、いいよ後輩ちゃん」
――ウチの腹が盛大に鳴り響き、楓先輩と帰りにノックバーガーに寄った。
あぁ、そういえばチェシャ猫もいた。

※

「うー、ただいまー」
「……　おかえり」
目黒の中心住宅街から少し離れた、まだ空き地や駄菓子屋のあるちょっとした団地にある長屋の一室が千梅の家である。
刑事である兄の奈樹と彼が保護した年上の家出少女の桜が同居人だ。
「あ、桜さん！兄貴いますか？」
「ナキはいない、でも私がいる」
「ハハハ、そうですね！」
「……　うん」

桜はほんのりと頬を赤く染める。一室を借りているため部屋数が少ない、そのため千梅と桜は同室になってる。数年前、一人暮らしを始めたナキの部屋に押しかけたのが実妹の千梅だ。

理由は至極単純、母親とキノコタケノコ論争で意見が合わず家出したのだ。ちなみに千梅はキノコ派だ。

「お風呂、沸かしてるけど、一緒に入る?」

「いや、私もそんな子供じゃないんで、遠慮しときますよ!・ていうか狭いでしょうに」

「――――狭いほうが、いい」

「え?」

「なんでもない」

千梅は気がついてないが、桜はレズビアンである。そして恩人の妹である千梅を密かに狙っている。

この間出会ったウサ耳の魔法少女も良かったが、本命は千梅だ。千梅が風呂に入ったのを見計らい、彼女の脱いだシャツ、パンツ、ストッキング、ブラジャーを洗濯機に入れながら密かにかつ大胆に堪能する。

次に千梅がさっきまで踏んでたバスマットを、その次に千梅の下着の入っているタンスの中のパンツの入れてる場所に忍び込んでいる使い魔であるハンプティパンティを

掴み出す。
「‥‥‥　チウメに迷惑かけちゃダメ」
「いや、何度も言ってるがこれは生理現象だ。やめれば俺は存在を維持できなくなっちまう」
「この際しなくていい」
「酷くね!?」
「次ここにいたら叩き割る。ここは私の場所」
「いや、サクラ、ここは千梅嬢の場所だ」
全く、人の楽しみを奪うなんてなんという卵だ。桜は三分ほどの幸福感を味わった後、タンスをそっと閉じる。
千梅がいない時にはやらない。何故なら彼女が初めてこの部屋という空間に存在することによって千梅の下着にも生気が宿るからである。
――――桜はその場でステッキを手に取り、静かに変身した。
「それで、次はどこに行けばいいの?」
「‥‥‥　急に仕事顔になるのやめてくんねぇかなぁ、どうも慣れねぇ」
やれやれ、と言いつつハンプティパンティは小型のデバイスを取り出し操作を始める。

「特に、かな。今日も東京の見回りだけでいいだろ、ていうか別にサクラがする必要ないんだぞ？」
「やる、チウメとナキに迷惑ばっかかけてられない」
「……　俺はいいのかよ、ったく、サクラが変身して外に出ると金がどんどんなくなっていくんだから、少しは遠慮してほしいぜ」
「それでも、やる」
　桜は魔法少女である。
　今でも魔法少女を必要としてる地域はたくさんある。
　例えば地域復興、例えばイメージキャラクターとして、例えば地元アイドルとして、例えば募金を募る者として、例えば一日警察署長としてだったり例を挙げればキリがない。
「――――チウメ、ちょっと出かけてくる」
「はーい！気をつけてくださいよー！」
　魔法少女桜は往く、この世界で魔法少女を必要としている場所へ。
「あ」
「だぁぁぁぁぁかぁぁぁぁぁらぁぁぁぁぁ、玄関から行こうって行ったじゃんかよオオオオオオオオオオオオオ!!」

――窓から足を踏み外して室外機に激突、いつも通りである。

6．がくさい

１０月２９日、ある平凡な公立高校の生徒会室には全役員が顔合わせ以来初めて顔を揃えていた。

会計、冴木餅望（※天然文系）

書記、電田篭（※炬燵警備単独部隊少佐）

庶務、木暮悠介（※短気な補習常連）

副会長、添咲カルマ（※ＤＱＮ）

同じく副会長、成宮ツァン（※チャイニーズハーフ）

会長、秋月楓（※魔法少女）

そしてゲスト、チェシャ猫（※魔法少女のペット）

「……　ちょっと待って楓、なんでこの面子に僕が含まれてるの？」

「え、七人の方がなんかカッコいいでしょ」

「そんな理由!?」

せっかくカルマの用意したドライアイスによる演出も無駄になってしまい、部屋には

二酸化炭素だけが篭っていく。
「――――って、死ぬわ!!酸素なくなるじゃねぇか、酸欠で死ぬわボケぇ!」
「そう言うなって、ユースケ先輩!会長ちゃんの要望とあればやるっきゃねぇだろ!」
「だったらせめて換気扇回せ!それで座ってないで今すぐ窓開けろ、換気換気!ていうか、ドライアイスなんてどっから用意したんだ!?」
「あ、うちが予算下ろした」
「モチモチー!?テメェくだらねぇことに生徒会の予算使ってんじゃねぇよ、会計の財布の紐緩すぎるだろ!!」
「もう、ゆうちゃんうるさい!あぁ、おこたが暖かい」
「あんたはさっさと卒業して大学受けて炬燵ごとこの生徒会から出て行ってくれませんかね!?」
　カルマが愉快に笑い、モチモチがそろばんを取り出し、コモルがミカンを食べ始める。その全てを指摘しツッコミを入れるのがユースケとツァンの二人というのが生徒会の日常である。
「――――って、ツァァァァァァン!!お前はさっきから何黙っちゃってんのオオオオオオオオオオ!!?」
　そう、いつもならユースケだけでなくツァンもツッコミに参加する。それなのに今日

は静か、というかチェシャ猫のことをひたすら撫で回したり頬をすりすりさせたりしてる。

「‥‥‥　え？」

「せめて話を聞け、ショタコン女！」

　中国人の父と日本人の母の間に産まれたツァンは生粋のショタコンである。近隣の幼稚園、保育園、小学校との交流会があれば積極的に参加し、近所の道場に行って未来を支えるボーイズを指導する手伝いに行く、まさに生徒会役員の鑑だと言えるだろう。

　楓に助けを求めるチェシャ猫、いや、楓ではなくツァン以外に誰でもいいからとりあえず助け出して欲しそうな表情を浮かべてる、哀れ。

「――――つーか、今日集まった理由は⁉会長権限で呼び出されたけど、俺帰っていいかな⁉」

「まぁまぁ、木暮先輩。こうやって親睦を深めることも大切なのですよ」

「わざわざ生徒会室に集まってやらなくてもいいでしょ！」

「わかってないなぁ、ユースケ君、おこたがそこにあればええんやで」

「面倒なので永遠にぬくぬくしててください⁉」

　高校五年生電田篭は炬燵の中から飼い猫を頭に乗せた！ぬくぬくしてる！

「‥‥‥　ふにぁ」

「ったく、じゃあ、会長さんよ。そろそろ俺たちを集めた理由、もとい本日の議題に入ってくれませんかね？」
「もう、木暮先輩は見た目に似合わず真面目なんですから！……　ごめんなさい、ちゃんとやりますのでその振り上げた拳を下ろしてください」
「チッ」
　一応推薦は受かってるとはいえ、ユースケも受験生である。フラストレーションが溜まってるのは当然、同級生であるツァンはチェシャ猫の癒しという良薬で発散している。
　――パン、パン、パンと三度手を叩き、楓は自然と指定席になったいつもの椅子に腰をかける。
「さて、本日皆さんに集まってもらったのは他でもありません。明日から始まる文化祭についてです」
　ここからは真面目モードに入りたい楓だったが、メリハリがないのがこの生徒会の特徴である。
　席に座ったのは木暮とツァンだけだ。ちなみにツァンの膝の上にはチェシャ猫がいる。だけど、それもまたいつも通りだとユースケはどこか諦めていた。
「たしかに明日は文化祭ネ、何かウチからも出し物するのカ？」

「いえ、私たちは見回りと文化祭がうまくいくようにバックアップに勤める方向でいこうと思います」
「‥‥　それ、前日に言うことじゃねぇだろ」
「ユースケ先輩、サプライズってご存知ですか?」
「知ってるぜ、こういう風に突然クソウゼェ後輩の頭をメキメキって鳴らすこともサプライズだろ?先輩からのサプライズだ、コラ。喜べ」
「痛い痛い痛い痛い!!?ちょ、すんません、まじさーせん!」
「ま、何をするにしても予算はうちが下すから安心してよ」
「生徒会の予算はもっと計画的に使え!」
「使わずして何が予算か!?」
「だからってほいほい許可してんじゃねぇ!!予算は有限だ!!」
　春、新入生歓迎に生徒会引率の四国横断旅行を行ったり、花見を週一ペースでやったり、夏には修学旅行先を沖縄からオーストラリアに生徒会権限で変えたり、近場の募金箱に一部注ぎ込んだり、コンビニで必要経費だとぬかして魔法のカードを購入し電子化させたりと予算は計画的、かつフルに活用している。
　それでもまだ余りがあるらしいから、もしかしたら学校側がどうかしているのかもしれない。

「まぁまぁ、今更そういうのはできないから予算は使わずにいこう」
「えー」
「……　あんたはこの生徒会を破産させたいのか、オイ」
「……　ユースケ先輩、そろそろ離してくれませんかね？さすがの俺でもこんな理不尽な理由で保健室行くのは嫌です」
　ただでさえ電田篭の持ち込んだ炬燵の電気代も予算から削られてるのだ。何でこいつが会計なんだと木暮の疑問は消えることはない。卒業しても、仮に異世界に飛ばされても忘れることはないだろう。だから、カルマの顔を強く握り締めることは仕方ないはず。うん、とユースケは自分は悪くないと思いつつゆっくりと力を抜いていく。
「で、会長さん。俺たちは一体何をすりゃいいんだ？」
「だからさっきも言った通り、見回りついでにゴミ拾いしたり、文化祭がスムーズに行えるようにしてほしい。道に迷ってる外部の方の案内とか、困ってる生徒さんへの対応とかね」
「なるほど、ネ。日本人特有のワビサビ、ありがた迷惑を積極的にやってけばいいのネ」
「ツァン、ちょっと違う。間違ってねぇけど何か違う」
「そういうことです、ご協力お願いしてもよろしいでしょうか？」
　生徒会長楓の言葉にユースケとツァンは顔を合わせて苦笑いを浮かべる。特に話を

聞いてなかったカルマとモチモチも似たような表情だ。チェシャ猫はどこか困ったような、戸惑った表情を浮かべ、コモルはぬくぬくしてる。

「――――それ、確認するまでないヨ。私たちは生徒会、仲間だから協力するのは当然ネ」

「――――っつーことだ、会長さんよ。あんたはどかっと座って偉そうにしてたらいいんだよ」

前生徒会長も支えた二人の言葉はしっかりと現生徒会長の楓にも伝わった。

そう、生徒会は一個人では運営できない。それぞれに役割がある分担作業。生徒会も一組織、組織は決して一人では動かない。

「あ、あとカキヤを見かけたら他の人とか気にせずに特別待遇よろしくね！彼氏なの！」

「うぉい!?」

――――ここで生徒会長の本音が漏れた。

※

唐邦祭。通称、カニ祭。

カニ祭中三日間は通常授業なんか忘れて生徒も教師も地域の人達も生物室のアロワナも無礼講だ。

生徒は朝早くから準備に追われたと思ったら、開会式に出席し、朝っぱらから打ち上

げ花火をドーン！と一発ドデカいのをぶっ放すのが恒例行事となっているようだ。
……　これ、いつか近所迷惑だとか言われるやつだとウチは思います。
今までよくやってこられたなと思うくらい派手にやってるんだけど、本当に問題ないのだろうか？
あ、ちなみに今日は皆制服ではなく、自分たちのクラスでデザインしたクラスＴシャツを着てる。
「……　楽しみ」
「ん？松子ってこういうの好きなの？」
「……　結構、好き」
「へー」
なんか意外ね。今日も変わらず両目を隠す長いストレートの黒髪によくわからない読むだけで呪われそうな本を持ってるのはいつも通りだけど。
「……　カップルとか、多いから、いい練習になる」
……　そう言って藁人形を取り出してるけど、何の練習？あまり聞かないでおこう、正直怖い。
生徒会長さん、もとい楓先輩の挨拶も終わり、ウチらはそれぞれの教室に戻ってる。
開校は１０時から、今は開校３０分前。それまでにクラスの模擬店である焼きそばの準

備をしなければならない。

「────お前らー！　我らが教室にテレビが欲しいかー!?」

「「「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!」」」

「祭りは好きかー!?」

「「「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!!」」」

「──　──　──　よろしい、ならば戦争だ。命をかけた戦じゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!　絶対勝つぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!!」

「「「っしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」」」

……えっと、何だこれ。

担任のふさっち置いてけぼりくらってるよ、千梅。盛り上げるのはいいんだけど、うん、松子も神城も普段とは違うテンションだし。学祭恐るべし。

特に校長の思いつきで「今年はいっぱい入学生入ってきてくれてガッポガッポでお金

が結構余ったからね、よし、文化祭で売り上げ一番になったクラスには教室にテレビを、体育祭で総合優勝したクラスには焼肉屋ミッチーの一日食べ放題引換券を贈呈しようじゃないか！」と、体育祭のときに割と本気で言って生徒の前で現物まで見せられたらやる気が上がらないわけがない。

しかも、実際夏に行われた体育祭で賞品贈呈されてたし、公立高校怖い。

「接客班はこっちに集まれ！ミーティングやるよ！」

「おぉ！バイト戦士の三竹さんが本気だ！」

「プロの目だ！」

調理班にいてはつまみ食いで客に出す分がなくなってしまうと追い出された三竹が燃えている！

４３歳、未だに独身のふさっちが「み、三竹さーん？うちはバイト禁止ですよー？」とか言ってる気がするけど気にしてはいけない。

「あ、ツバキちゃんもこっちこっち」

「ん？」

あれ、ウチはたしか調理班って聞いてたけどいつから変更になったんだろ？

「調理班集合ッッッ！こちらも最後のチェックと仕込みを行う！」

「すげぇ気迫だ！」

「あの五つ星レストランの息子にして次期後継者、さらには料理番組や雑誌でも取り上げられてる押忍の兄貴！」
「先月なんか、フランスに料理修行に呼ばれてたらしいぜ」
「しかも彼女持ちで書道部所属！」
「料理部所属じゃないの!?」
　・・・・　あいつ、そんな経歴持ってたんだ。ていうか男子の大半が調理班なんだ。ふさっちも調理班みたいだけど、あの暑苦しさについていけるのかな？
　そういえば三竹に呼ばれてたんだっけ、何の用だろ？
「ねぇ、ウチってたしか調理班だったよね？」
「うん、ちょっと兄貴に言って変えてもらったんだ。ツバキちゃんには客寄せやってほしくて」
「そうなんだ」
　そういうことは本人であるウチを通して欲しかったけど、急遽決まった感じなんだろうな。三竹も忙しいわけだし、あまり責めることもできないなぁ。まぁ、いっか、別に困ることでもないし。
「それで、ウチはビラでも配ればいいの？」
「それもそうなんだけど、ちょっとついてきて」

「？」
「あ、ミーティングは終わりね！総員配置について、わからないことがあれば即時電話で連絡を入れること！」
「はい！」
「わっかりましたー！」
グッと親指を立てた三竹に対して、ビシッと敬礼した接客班の皆さん。よくわからない団結力だ、ここは軍隊じゃないんだよ。
調理室に向かう上京して一人暮らしを始めてみたはいいけど、彼氏どころか浮いた話が２０年近くないふさっちが「み、三竹さーん？校内でのけ、携帯電話の使用は、禁止、です、よ？」と弱冠自信なさげに言ってるけど気にしてはいけない。
開校１８分前、ウチは三竹に連れられて女子更衣室にやってきた。更衣室の扉には男女共に鍵付きで女子更衣室のロッカー一つ一つに鍵が付いてると二重ロックとなってる。それでも下着泥棒なんか普通にあるので、男子の執念すごいなとたまに感心してることは内緒である。
「ごめんね、実は兄ちゃんに頼んでた衣装が間に合わないはずだったのに、何故か一着だけ間に合ってツバキちゃんに合うサイズだったから」
「・・・・　なんでウチのサイズ知ってるの？」

「健康診断の時に」
　なるほど、と納得しかけたけど納得しちゃダメなやつだ。
「それで本来なら接客班の女子皆に着てもらいたかったんだけど、そっちは間に合わなくてね」
「‥‥‥　もしかして、これ？」
「そう、これ！」
　――――さて、調理班に合流するか～。
「ちょ、ちょっち待ってツバキちゃん！お願いだから待って！」
「いやいやいや、いくらなんでもこれはないでしょ！どういうコンセプトでこんなデザインなわけ?!」
「兄ちゃんの趣味」
「ちょっとあんたの兄ちゃんと直接話がしたい！」
　いや、だってなんか色々おかしいもん。青を基調とした丈の短い裾や袖にフリルのついたワンピースインナーの上に白いフリルたっぷりのエプロンドレスのようなメイド服もどきなデザイン。同じく白色で清楚な感じの手袋に紫と黒のボーダーのソックス、さらには茶色のブーツまであるしさ。ぴょこ、と頭に付けるであろう黒の大きなリボンもきちんと用意されている。

ていうか明らかに焼きそば屋とミスマッチすぎて怪しいわ！
「ツ、ツバキちゃぁ～ん」
「‥‥‥　仕方ないなぁ、今回だけだからね」
「ありがたき幸せ！」
　時間もないことだし、いつも着てる魔法少女のコスチュームに比べたら露出も少ないからいいだろう。まだマシだ。あくまでも接客業と思えばなんの問題もない、うん、大丈夫大丈夫。
【ギ‥‥‥　ピピ、ガガガッ、ザザー‥‥】
　着替えてる途中で魔女の声が聞こえた気がする。でも、いつもと違う、何だかノイズが走ったような声が頭の中に響いた感じだ。
　改めて鏡の前に立ってみたが、何というか、自分でも嫌って言うくらい似合ってる気がする。本当に最初からウチのために作られたような、そんなわけないけど、そう感じてしまうほどしっくりくる。
「‥‥‥　なんか、髪型がしっくりこないね。ツバキちゃんちょっと座って」
「え、もう開校まで時間が」
「大丈夫大丈夫、私一応美容院でもバイトして二年経つから！」
「ちょっと待って!?それおかしくない!?」

たしか三竹はウチと同い年で同級生だったはず！まさか、サバを読んでる!?
「細かいことは気にしない気にしない！さ、大人しくしててよね！」
「う、うん」

※

カッ!!
起床した唐吉と時計ウサギが向かい合ってツバキの置いていった朝食を食べていると、従姉弟の勘を働かせた唐吉の目が大きく開かれる。
「高校の更衣室でツバキ姉が三竹先輩と百合百合してる電波をキャッチしたッス！」
「お、おう」
「――――こうしちゃいられねぇッス！行くッスよ、ウサギっち、ツバキ姉の元へ！」
「待て、女子更衣室はさすがにマズイのでは!?」

※

三竹の兄、桐助は引きこもりで変態である。
居住する世界は八畳間。壁を埋め尽くすはカレンダーと多くの聖典とブロマイド、偶像崇拝の傾向があると思われる。最新鋭のＰＣが三台、それぞれにモニターが五つは取

り付けられている。そして極め付けは冷蔵庫。兵糧戦にはもってこいな状況だが、平和ボケした現代社会において役立つことは数少ないであろう。

三桁を越える体重を他人が動かすことは難しい、まさに動かざること山の如し。かつて、この家に泥棒が侵入し、この部屋の目を当てられたのか、哀れみとどこか怯えたような様子で何も盗まずに撤退していったという。

彼の体格を見て恐れをなしたという者もいれば、何か霊的な存在がへやに住みついて追い払ったと言う者もいる。

そんな外に出ること自体が稀な桐助でも金を稼ぐ手段は得ている。

現在、とある会社に衣装デザインを提供しているのだ。専属で、しかも高給ということで桐助本人も満足している。そういえば先日三竹に試作品の服を一着渡した気がするが、その日は気分良く酔っ払ってたのであまり覚えていない。

――MAGIC GIRL DRESS_MODEL ALICE_PROTOTYPE_05、まだ完成していないデザインの一つだ。

デザイン面に問題はない、だが、どこか物足りない、何かが違う。契約会社側とも幾度となく打ち合わせをしているが、答えは見えないままである。

「――魔法少女、ね」

何時間ぶりか、いや、何度目かわからない独り言を桐助は静かに呟くのだった。セッ

トしておいたタイマーが3分を告げる、カップラーメンができあがった。
一先ず食事をしようと桐助の体重でギシギシと悲鳴を上げる回転椅子をぐるりと回転させた。

※

……どうしてこうなった。
カニ祭が始まり既に二時間が経っている、昼時ということもあり食べ物を販売してる模擬店はどこも賑わっている。焼きそばをやってるうちにも言えることだが、それでもウチはあまり喜べない、というより素直に喜んでもいいのかわからない状況が目の前で起こってる。
「すみません！カメラ目線お願いします！」
「こっちも、ちょっとポーズ変えてみてもらってもいいですか!?」
「いっそのこと脱いでくれても、ぐへへへ」
「はいはいはーい！押さないで押さないで、順番ですよ、お一人様１００円になりまーす！」
――売り子として、宣伝はうまくいった。だが、今は焼きそばの売り上げよりもウチの撮影会の方が僅差で勝ってしまってる、正直申し訳ない。押忍君が午前以上に気合

い入れて作ってるから教室前は大所帯となってしまってる。
　ていうか唐吉に時計ウサギ、しれっと並んでんじゃねぇ。
「写真撮影の列はこちらになります、焼きそばの列は向かって左手の列へお並びください！」
「写真撮影の列と焼きそばの列は別になってます、ご注意ください！」
　それにしても不思議だ。押忍君を筆頭にして作った焼きそばは普通においしかった、それこそよくわからないくらいに。おいしいから評判になるのはわかる、そこで一緒にウチの話が出るかもしれないというのもわかる。こんな奇抜な格好してるんだから。
　それにしても人が多すぎる気がするのは気のせいだろうか、さっきコスプレ界で有名なカメラマンさんから名刺までもらってしまったし。世間が狭いとかそういうのでは説明できないレベルな気がする。
　……　もしや、三竹は今ウチの近くで列整備と撮影代を徴収している。儲けのために撮影会をすると言ったのは三竹だ。ふさっちが「み、三竹さーん、ツバキさーん？なんで先生の教室こんな人いっぱいなのー？ていうか凄いかわいい服！後で先生にも――――」とか四十路の担任教師らしからぬ発言をしてたので社会科教師のセージに連れて行かれてた、多分生徒指導室だろう。
　まぁ、いいや、三竹とは話せる位置であることに変わりない。

「ね、ねぇ三竹、そういえば千梅はどこ？」
「千梅ちゃん？千梅ちゃんにはビラ配りと宣伝と情報操作頼んでおいたから近所走り回ってるんじゃないかな」
「……　それって、ウチのことも？」
「美人な売り子がいるって宣伝もしっかり頼んどいたよ！」
　やっぱりあいつか！次見かけたらアイアンクロー確定!!いや、それだけじゃ足りないかな、ちょっと練習してるプロレ「すみませーん！視線お願いしまーす！」あ、はいはい。
「ツバキ姉！なんで俺のツバキ姉が大衆に晒されることになってるんですかッッッ!?」
「いつからウチはお前のものになった！」
　馬鹿な弟分がいたのでとりあえずアイアンクロー。うむ、今日もメキメキといい音が鳴ってる。
　周りのカメラマン達もいいぞ、もっとやれみたいな表情でパシャパシャとシャッターを切り続ける。
「気持ちいいいいいでででででででででで!!?ちょ、ウサギっちぃ、ヘルプヘーループ―!」
「……　まったく、そろそろ放してやったらどうだツバキ」

……　なんか、この二人微妙に仲良くなってない？
「ていうか、なんであんたまで来てんの？」
「君の従兄弟君に連れ出された、それ以前に私は君の使い魔だ。傍にいるのが本来は当たり前なのだが」
「知らないし」
　周りに聴こえないような声で会話する、魔法少女関連の話だと大っぴらに話すわけにはいかない。
　楓先輩は堂々と使い魔を連れ回してたから凄いと思う。ていうか人型だったし、時計ウサギは動物に近いのに、何か違いがあるんだろうか？
「早速だけど、ツバキ姉！一枚撮らせて――――」
「ざけんな」

※

「……　な、何故唐吉様とツバキが、一緒に？も、もしかして、私もこうしちゃいられないわ。今すぐ秋葉原に行かなきゃ」
　松子は違う意味で戦慄し、とある決意を固めていた。

7．さいかい

カニ祭二日目、松子はゴシックロリータ、いわゆる黒を基調としたゴスロリ服を着ている。

……　いや、なんで？

「……　これで唐吉様の視線は、私の、モノ！」

「じゃ、松子ちゃんも張り切ってるみたいだし、ビラ配りよろしくね！」

「……　え、ちょ」

まぁ、そうなるよね。ウチも当たり前のように昨日と同じ服着せられたし。

三竹ってこういう食と金の絡むところじゃ逆らえない圧があるからなぁ、逆らったら後が怖そう。

ここは素直に言うことを聞いておいた方が良さそうだ。なんでも、今日は三竹の家族が来るとか来ないとか。

それ、にだ。

「……　今日はついてきたんだ」

「あぁ、少し気になることもあってね。唐吉君はまだ寝てたよ」
「そう」
　別にいらない情報だった。来たらちょっとうざいかなぁ、と思うだけであってウチが直接被害を受けるわけでもない。
　ただ、ちょっと寂しいと思っただけだし。
「あ、いたいた！ツバキちゃーん！」
「か、楓先輩!?」
「ていうか何その服、かわいい！」
　ビラ配りのため校内を歩いてると楓先輩と帽子を被ったチェシャ猫と遭遇した。
「あれ、もしかしてこの子がツバキちゃんの使い魔？」
「え、えぇ」
「……　まさか、あんた時計ウサギか」
「久しぶりだねチェシャ猫。元気そうで何よりだ」
「まぁ、ね」
　時計ウサギがチェシャ猫を見上げる形になってるのに、時計ウサギの方が胸を張って偉そうにしてるように見える。このちんちくりんが。
　身長差のせいで時計ウサギが本当にちんちくりんにしか見えない。

「それで、先輩はどうされたんですか？」
「あぁ、そうだった！午後の二時くらいに時間取れる？」
「えぇ、と、その時間でしたら――――」
シフトは入ってなかったはずなんだけど、三竹に何か頼まれるかもしれない。それに休憩に入るまでに着替えもしたいから、時間的にギリギリになってしまう。
ウチが葛藤してるとその原因、というか我がクラスを一時的に掌握してる三竹がポンとウチの肩に手を置いた。
そして、いい笑顔、さらにサムズアップをして言う。
「生徒会長さん、大丈夫ですよ！時間はこちらで調整しますので！（ふふふふのふ、ここで生徒会長さんにうちのクラスを宣伝できれば学校中に知れ渡るのはもう必然！宣伝はできることからしておかないと、ツバキちゃんにそこで宣伝を頼めば、ツバキちゃんみたいな子がいるってことで更に集客効果が期待でき――――）」
そうだから、全力でプロデュース！なんてことを考えてそうな顔だなぁ。
「そう！それは助かるわ～！実はちょっとステージをやろうと思ってね！」
「ほほう、それは具体的にどのような？」
「えっとね、まずはあと一人誰かに声をかけて――――」
……　ウチを他所に話は進んでいく。三竹はどこからか算盤を取り出して、メモまで

もしてる。
　もうすぐ開校時間なんだけど、大丈夫なのかな？松子は松子でビラ配ってるけど、正直怖い。
　あれじゃ、お化け屋敷の宣伝をしてるようにしか見えない。廃墟へようこそとか地獄へようこそとか言い出しそうだ。
「ほら、行くよチェシャ猫！カキヤが来ちゃう！」
「はいはい」
「あれ、三竹話済んだの？」
「済んだよ～、それよりもほら、もうすぐ開校だから今日は一階の方中心にお願い！あ、あとシフトも少し変えといたから確認よろしく！」
「え、マジ？」
「うん。ここを代わりに松子ちゃんを入れて――――」
　生徒会長からのお誘いを断るなと言われてるようだ。さっき何か札束らしき紙を受け渡ししてたのがチラッと見えたし。
　……　見なかったことにしておこう。
　シフトの変更を聞いて、ウチはカニ祭の玄関口でもある一階のロビーでビラ配りを始める。

時計ウサギというマスコットの力、押忍家のネームバリューのお陰もあってか、昨日より早く全て捌けることができた。例のごとく撮影会が始まろうとしたが、生徒会の方々といつの間にかできてたファンクラブの皆さんのお陰で昨日ほどの騒ぎにはならなかった。

【――ギ、ピ、ピラピラ・・・ッ、パッツン】

「ツバキ、今のノイズはどういうことだい？」

「え？」

そっか、たしか使い魔にも魔女の声とやらは聞こえるんだった。そういえば、昨日もこんな感じにまともな言語に聞こえないことあったな。

「どう、って？」

「・・・・　少し話をしたいところだ。ちょっと待ってくれ」

と、時計ウサギは首から下げたタブレットを操作した。するとどうだろう、一階ロビーから人がいなくなった。まぁ、時間は一時間ちょっとかかったけど。

「・・・・　今度は何したの？」

「変身時の人払いがてらこの一階周辺にペンキ塗りたての看板と立ち入り禁止の看板を使わせてもらった。さらに違和感を失くすためにチェシャ猫にも協力してもらって生徒会、そこから教師陣、理事長に連絡を通した上で緊急という形で措置を取ってもらっ

た。入り口も裏門に変えてもらった上でね」
「……　相変わらずアナログ方式、ていうかこういう時こそ魔法の力とかじゃないの？」
「そんな便利なものが存在するなら私は使えるようにしたいものだ」
「おまいう」
　なんか釈然としないなぁ。今回も多分こいつのポケットマネーから出てるんだろうな。
「それで、魔女の声がいつからそうなったんだい？」
「えっと、昨日かな」
「カニ祭が始まってからか。始まってから変身は？」
「してない」
「ふむ」
　何だろう、いつになく真面目な雰囲気をしてる。もしかして緊急事態なんだろうか？
「……　一度本部に戻る必要があるか」
「どうしたの？」
「いや、何でもない。試しに一度変身してもらってもいいかい？」
「ステッキは教室の鞄の中なんだけど」
「……　私が取ってこよう」

「いや、その必要はないッス！ほらツバキ姉！」
「ありがとね。戻ってきな、時計・・・・　ん？」
「え？」
「はい？」
　あれ、時計ウサギが人払いしたって言ってたはずだよね？
　けど、ウチにステッキを持ってきたのはどっからどう見ても見間違えようのない愚弟だ。この見慣れたアホ面を間違えるはずがない。
「か、唐吉君!?」
「酷いぜウサギっち！俺を置いて先に行くなんてさ！」
「それ、あー、ごめん、寝てたから。ってそうじゃなくてどうして!?」
　時計ウサギ物凄い剣幕で唐吉に迫る。対する唐吉はのんきに「んー」と言いながらポリポリと頬をかいてる。
「いやぁ、なんつーか、ツバキ姉が俺のことを必要としてる気がして――――」
「大丈夫、してないから」
「おうふ!?辛辣!?」
　まさか立ち入り禁止やらペンキ塗りたての看板のあるところにまでやってくる馬鹿だとは思わなかった。

しかも、ステッキを持ってきたということは一回教室に行ってウチの鞄を漁ったことになる。荷物の類はクラスの皆しか入れないところにまとめて置いてるというのに、そこに入ったとか。やっぱり馬鹿だ。

「それじゃ！俺はダチを待たせてるんで戻るッス！」

……　あいつ、友達いたんだ。

唐吉の姿が完全に見えなくなったのを確認し、辺りに小型のカメラもないことを確認。さらに唐吉の残留思念がないと判断して時計ウサギから許可をもらい、久々に変身をしてみた。特に何の問題もなく変身できた、いつも通りだ。

「……」

「どうしたの？」

「いや、合点がいった」

「……　そう」

こいつが何を言ってるかは全然わからない。ウチはこいつのことも魔法少女のことも何も知らない。いや、知ろうとしなかった。

……　はぁ。

「ねぇ、時計ウサギ」

「何かね？」

「――人払いが解けるまでさ、あんたのことと魔法少女のこととか。色々教えてくれない？」

「……　ツバキ」

もう、戻れないんだ。片足も突っ込んじゃったし、魔法の力も使ってしまってる。なら、少しでも知った方がいい。

全然納得いかないけど、こいつのバックに何がいるのかも気になるところ。

「何か、悪いものでも食べ――」

ウチは容赦なく、変身した状態で本気で心配してくる時計ウサギの顔面に蹴りを入れた。

※

『メルスィーボクゥ！カニ祭二日目も後半戦に突☆入！』

『早いものッスねぇ』

『そうだね、この放送を流すっていうことはそういうことだから、ネ。いつもはお昼休みにやってるけど、この二日に限っては校外の皆様にも楽しんでもらいたいですネ』

『えー、パーソナリティは何か面白いネタがあれば提供してほしい系女子の千梅ちゃんと――』

『生徒会が生んでしまった罪、星よりも輝き放つイケてるメンズ代表！添咲カルマ＝です☆』
『では本日の校内放送、クラブラジオクラブを五分拡大版で始めまーす！』
『んー、今まで昼休みの描写なんてなかったから今回が第一回にしか思えないね！フレッシュだ』
『初心忘るべからずッスからね！カルマ先輩さすがッス！』
『だろ？もっと褒め称えていいんだぞ！』
『そうしたいんですけど、時間が押してるらしいのでやることパパッとしちゃいましょう！次は私ら体育館に行かなきゃですし！』
『おぉ、そうだったな！ステージの司会進行の仕事もあったんだった！僕らがここでグダグダしてると、そっちも遅れるんだった！』
『はっはっはっはっはっはっ！』
『あっはっはっはっはっはっ！』
『それでは、最初のお便りー！北海道にお住いのゲレンデホームレスさんから！』
『遠方からのお便り感謝するぞ！』
『えっと、何々？
　みなさんカニ祭楽しんでますでしょうか？ＯＢとしてそちらに行きたかったのです

が、急な仕事が入ったのでお便りさせてもらいました。
質問ですが、今のカニ祭七不思議はどうなってるのでしょうか？
私１４期生なんですけど、今はどうなってるか気になります』
『なるほど、カニ祭七不思議！聞いたことないですね、次行きます！』
『お次は、現在我が校に在学中の美術部の堕天使さんから！
フハハハハハ！我の便りが読まれる頃、我は聖域にて彩の世界を創世している頃であろう！
我ら美術部の個展をよろしく頼むぞ！３階美術室前だぞ！忘れるなよ、我との約束だぞ！』
『お疲れ様でーす！次ー！』
『お便り終わりでーす！』
『では、次に入る前に宣伝！午後から体育館ステージにて、我らが生徒会長カエデちゃんがシークレットプランによる演目をやるぞ！ぜひ来てくれ！』
『先輩先輩！それ言っちゃシークレットになってないッス！』
『ハッ!?まぁいい、次のコーナー！』

……　何をしてるんだ、千梅は。

約束の時間に楓先輩と合流し、今は生徒会室である。
「……　楓、あれでよかったのか？」
「モーマンタイ！」
むふ！と胸を張る先輩。相変わらずデカイ。
「ていうか、ステージって何するんですか？ウチ何も聞かされてませんけど」
「それはもう一人が到着してから伝えるわ。千梅ちゃんの紹介してくれた人なんだけど、もうすぐ来るはず」
「……　千梅が紹介って」
正直嫌な予感しかしないな。
あいつと関わってて嫌な予感がしなかった時があっただろうか、否！ない!!
「ていうか、どんな人なんですか？」
「さぁ、少なくともうちの高校の生徒じゃないらしいけど」
「へー」
ていうか、楓先輩と千梅ってどういう関係なんだろう？
「ねえ、チェシャ猫。時計ウサギちゃん起きそう？」
「……　微妙、かな。結構深く蹴り入っちゃってるし」
「ツバキちゃん、生き物は大切にね」

「はーい」
校内放送はまだ続いている。
カルマ先輩のナルシスト発言に千梅の煽ての掛け合いが延々と行われているから終わるものも終わりそうにない。
これ、毎回昼休みにやってるんだって改めて思うとヤバイな、うちの高校。
買ってきたチョコバナナを三人で食べていると、生徒会室の扉が勢いよく開かれた。
「あ、カキヤ！」
「え、唐吉!?」
「よう、楓、お待たせ」
「あれ、ツバキ姉」
もう会わないと思ってたのに、まさかこんな形で会うなんて。
「もー、遅いよカキヤ。ステージまで一時間くらいしかないよ！」
「悪い悪い、僕も色々あったんだよ。なんだ、いたのかクソガキ」
「あ？なんか言ったかハエ男」
「ハッ、エ…　相変わらず感に触るチビだ」
「テメェこそな」
「ちょ、ちょっと二人とも～！」

「僕は認めないからな！魔法少女なんて馬鹿げた存在絶対!!」
　え、あの人魔法少女のことを知ってる!?
「ツバキ姉はなんでここに？」
「ちょっと黙ってて」
「おい、テメェ軽々しくそういうこと言うんじゃねぇよ！楓に危険が増えたらどうするつもりだ？」
「そうなれば僕が守る。僕は古今東西様々な格闘技に精通しているから、君と一緒にいるよりは現実的で合理的だろう？」
「なぁ、ツバ――――」
「一時間後にウチらステージやるから体育館で待ってて」
「ひゃっほーう！そうさせてもらうッスー！」
　馬鹿は去った。
「カキヤさん、でしたっけ？」
「何だ君は？」
「――――魔法少女のツバキです」
「ッ、君も!?」
「……　同じく、魔法少女のサクラ！」

「誰や!?」
メガネの男、カキヤが振り返ったとこには白髪の女性、ってあれ？
あの人たしかあの時警察手帳を持って帰って行った人！
「全く、サクラ。君はもっとマナーというものを学ぶべきだ。入室前にノックは三回してだな」
「ハンプティパンティ!?」
「おや、チェシャ猫ではないか。そこで横になってるのは時計ウサギか？」
――あの人も、魔法少女!?
「ふむ、となるとその麗しきパンティを履いた二人のレディも同種、というわけか」
「……　少し黙って、この子たちに変な印象持たれたら困る」
「おいおい、ご主人様といえど譲りはしないぞ？」
なんだろう、あのタマゴみたいな時代遅れなカイゼル髭の親父。生理的に無理、普通に受け付けることができない。
白髪の、サクラって人がこっちに気がついたっぽい。視線を向けてこっちに向かってくる。
「……　君は、たしかナキの手帳を持ってきてくれた娘」
「ど、どうも」

「その節は世話になった」
　あれ、意外と友好的な感じ。なんか、ネットリとした品定めするかのような視線が気になるけど、カイゼル髭よりはマシだ。
「ちょ、っと！二人とも！」
「――――まだ言うかテメェ！テメェがそうやって魔法少女と公言してること自体が楓に危険を晒しかねないってのがわからねぇのか!?」
「――――何度でも言うさ！それは君が彼女を魔法少女という存在にしたからなんだろ!?だったら君がステッキを持ち去り、楓から離れれば済む話だろと何度言わせるつもりだ!?」
「だから――――！」
「いや、君は――――！」
「うるさい！」
　――――話が進みそうになかったので、カキヤって奴をウチとサクラさんで蹴り飛ばした。
「・・・・　あ、改めて自己紹介しましょうか！私は楓。この高校の生徒会長で魔法少女、使い魔はこのチェシャ猫でカキヤは私の彼氏」

（デカイ）
（デカイ）
巨乳の上に彼氏持ちとか、パネェ、楓先輩マジパネェっす。
「私はサクラ。使い魔はこの変態、もしパンツがなくなってたら最初にこいつを疑って」
「……　もっと他にあるだろ？」
「ない。あと、私は女の子とは積極的に仲良くしたいと思ってる。デュフフフ」
――――変態コンビだったのか。
なんかカイゼル髭とは違う意味で身の危険を感じた。チェシャ猫も何か感じたみたいで楓先輩を庇ってる。
……　彼氏のカキヤってメガネはぐーすか眠ってるけど。
っと、次はウチか。
「ウチはツバキ、使い魔はこれ。クラスで焼きそばやってるから時間があれば来てくれると嬉しいです」
「おい見ろよチェシャ猫。時計ウサギが耳を掴まれて物呼ばわりされてるぞ、笑うところじゃねぇの？」
「あんたはまず頭にある被ったパンツをどうにかしろよ、それ誰のだよ？」
それにしても、この場に集まった全員が魔法少女だなんて。変な偶然があるもんだ

な。
「ふふふ、偶然じゃないわよ。私が仕組んだんだもん」
「え？ていうか、心の声」
「魔法を使わせてもらったわ。【読心魔法】は熟練度を上げれば変身しなくても使えるのよ」
へー、熟練度か。そんなものがあるんだ。サクラさんもうんうんって頷いてる。
この二人は魔法少女になってそれなりに時間が経ってそうだ。ウチが一番の新参者、この二人のどっちが長いかはわからないけど、少なくともウチよりも知識も経験も豊富なはず。
時計ウサギじゃなくて、この二人に聞いてもいいかもしれない。
「それで、私たちはこの後のステージで何をすればいいの？」
「あ、そうだった！実はね――――」
そうだ、そのために集まったんだった。時計ウサギも目を覚まし、使い魔も囲んで生徒会室で魔法少女達による会議が始まった。

※

その頃、ビラ配りをしている松子の目に体育館へ向かう唐吉の姿が映った。

――――そこから松子の行動は素早かった。自分の着ているゴスロリドレスを近くにいた女子生徒、控えめで大人しく勤勉で学年どころか教師陣の中でも有名な音無子猫（おとなしこねこ）に着せて、ビラを全て手元に置いてサムズアップをした後、下着姿で松子は体育館へ向かった。

その後、体育館前でゴスロリ姿で頬を赤らめる優等生の写真撮影会が行われると同時に生徒、教師陣と共にファンクラブが設立され、体育館内ではランジェリー姿で徘徊する松子の姿が多くの人に目撃された。

後に「体育館前の衣替え現象」「体育館の下着女」がカニ祭七不思議として語り継がれることになるのは別の話。

※

体育館のステージ演目。

このカニ祭の目玉の一つと言っても言い程に盛り上がるプログラムの一つ。

今年はゲストとして「ＣａｍｅｒｅｏＮ」という大学生と高校生で結成された若手バンドが呼ばれた。

プロ枠としては九之島真娘がこの後来る手筈になってるらしい。

他にも演劇部や競技ダンス部、軽音部や吹奏楽部に美術部までもが猛威を振るうまさ

に文化の祭典のステージ。
　――そう、正直に言うとありえないくらいにカオスなのだ。
「……　楓先輩、もしかして去年もこんな感じだったんですか？」
「そうよ！楽しそうでしょ！」
「ま、まぁ、はい」
　子供のように目をキラキラさせてる先輩に本音を言えるわけもなかった。
「でも、ホントにやるの？ウケはいいと思う、でも、人前出たくない」
「やるの！こんな時こそ授かった魔法少女の力を存分に発揮しなきゃ！」
「多分、使うところ違います」
　今、ウチら三人は変身した状態で体育館のステージ裏で待機してる。
　なんか、改めて見るとこのコスチュームってやっぱりデザインが際どいというか独特というか。
　サクラさんと楓先輩のコスチュームも相変わらずだ。ウチとはまた違った要素があって、エロい。
「時計ウサギ達置いてきちゃったけど、いいんですかね？」
「いい、あの変態はむしろ連れてきちゃ駄目」
「それにチェシャ猫に説教されるのも御免だしね」

二人共、使い魔に苦労してるのか使い魔に苦労させてるのかわかったものじゃないな。

変身するためだけのために人払いもしなきゃいけないし、それがまさかのポケットマネーから出てるんだもんね。

……ん？あれ??

そうだ、人払いをするんだったら、ウチらの正体がバレたらヤバイ。

でも、魔法少女に守秘義務はない、それにこれからウチらはこの顔でステージに立つ。

魔法少女とは言わないけど、バレる要因にはなるんじゃないの？

でも、だったら何で変身の度に人払いなんて面倒なことを？

「ツバキ、ちゃん？どうしたの、ここが痛いの？」

「ひゃ、ちょ、サクラさん!?急にお腹撫でないで！」

「てへ」

もう、超びっくりした！

『では、次でラスト！なのかな？そうだよね、千梅ちゃん？』

『そうですとも！我らが生徒会長様率いる精鋭部隊によるオンザステージッスよ！』

「もうすぐね！準備はいい？」

「うん」

「はい！」

――――もう、難しいことを考えるのは後回し！

今は目の前のステージに集中する！

『では、登場してもらいましょう！魔女っ娘連合軍！』

チーム名がアウト！

ていうかサクラさん！初っ端から転ばないでください!!

※

体育館の客席には妹の誘いでカニ祭を訪れていた桐助は座っているパイプ椅子を体重で押しつぶし、目の前の光景にいたく感動していた。

自分のデザインしたドレスが可愛い女子が着て、踊ってる！

しかも全てが上玉、桐助の頬が静かに歪む。

――――見つけたぞ、魔法少女！

8．ほうしん

株式会社ワンダーランド。

天下の大企業として名を馳せていたトイザ〇スの上に立つ、玩具販売製造会社であり、今やその名を知らぬ子供は日本に存在しないだろう。

しかし、それはあくまでも表の顔。　ワンダーランドは本来子供の夢を叶えるための玩具専門会社という夢いっぱいにあふれる施設にあらず、世界を根本からひっくり返すことのできるほどの財力と兵力を有している。

――――魔法少女。

使い魔を使役し、選りすぐりの少女にステッキを与えて魔法少女として育成するものである。

魔法といっても、科学の力を行使した現代文明の最先端をこの会社が特許を所持していると同時に国により存在を隠蔽されている。

そんなワンダーランドの東京本社の地上三階のありきたりな会議室にて珍妙不可思議な存在が一堂に会していた。

「――――では、これより使い魔による使い魔のための使い魔達による定例会議を行う」
デスクに片肘をついた議長を務めるワンダーランド代表取締役である、間宮林道（まみやりんどう）が清潔さの欠ける無精髭を撫でながら声を発する。
デジタル時計ウサギ、ハンプティパンティ、チェシャ猫の他にも使い魔が数体が安物のパイプ椅子に腰掛けている。
「‥‥　何度も思うのだが、会議室の椅子はもっと何とかならんのかね？　座り心地がよろしくない、これでは私の身体が割れてしまうよ」
「誰のせいで予算が削られてると思ってんだ、お前のとこのドジッ娘のせいで赤字続きなんだぞ」
変身回数、器物損害、魔法によるエフェクトの誤魔化し、人払い、口止め料、道の緊急整備などといったことに予算を回してるのは事実である。
現在ハンプティパンティの担当してるサクラがワンダーランドの予算を大きく削ってることは変えようのない事実なのだ。
林道は青筋を浮かべながら溜息を吐く、魔法少女が魔法少女なら使い魔も使い魔、まともに相手にするだけ時間の無駄である。
現在時刻は２５時、林道も眠気とストレスで苛立ちが表に出てしまっていたようだ。
「まぁ、今はそのことはいい。　諸君らの活躍のお陰で当初の計画通り魔法少女の存在

はゆっくりとだが、人々に認識されつつある」
「衣装をデザインしてくれた彼の存在も大きいですがね、まさか現代日本でこれほど魔法少女の素養ある少女が多く見つかるとは予想外ですが」
「‥‥‥　帽子屋、君のところの居候は魔法少女としての素養はあったが、被害を出しすぎてないか？」
「仕方ありません、あの子はそういう子ですから。　しかし、好条件だと言って仕事を押し付けてるではありませんか」
「仕方あるまい、家出少女という身分ほど扱いやすいものはない」
「ま、約束さえ守ってくだされば僕は何も言わずにご協力いたしますよ」
　帽子屋、奈樹を名乗る刑事は目を細めながら、林道とハンプティパンティに視線を向ける。
「お互いにとって利のある関係という名のか細い糸が僕達を繋いでるのです、切るタイミングはいつでも構わない」
「そんな日が来ると願いたくないものだな、帽子屋」
「ええ、全く」
　表情は笑っているが、内心は一切笑っていない。　この場に数少ない人間二人のやり取りに腰掛けた使い魔の一体、白馬の王子が痺れを切らす。

「――――それで、我々が集められた目的は？　本日の議題すらもまだ聞かされてませんが？」
「あぁ、そうだったな。　すまなかった」
　林道は顔を覆い隠しながら、ＷｏｒｄとＥｘｃｅｌを駆使して作成した資料を回す。
「今回諸君らを招集したのは他でもない、ＡＬＩＣＥ―ＴＹＰＥの適合者が見つかった。
　さらに、異なるＤＲＥＳＳを二種類着用できるということがデジタル時計ウサギの報告によって判明した」
　――――林道の言葉に会議室に衝撃とざわめきが駆け抜ける。
「ふふん」
　一体、報告を行ったデジタル時計ウサギは一人得意気だ。　チェシャ猫は固唾を呑み、デジタル時計ウサギに一瞬だけ目をやる。
　デジタル時計ウサギの向かいに座る赤のお転婆姫が資料を叩きつける。
「――――納得いきませんわ。　何故今になってそのようなことで妾達が招集されなければなりませんの？」
「落ち着きたまえ、これは非常に危うい事態なのだ」
「それは我々にとって？　それとも、林道取締役個人にとってですの？」
「・・・・　両方、と言っても君は根拠がなければ信じないだろうな」

「当たり前ですわ、他人を納得させるのに根拠が不要だなんて野蛮極まりありません」

本来、魔法少女のコスチュームことＤＲＥＳＳは一人一着が原則とされている。

理由としては人体が魔力に耐えきれない、魔女の声を正確に聞き取ることができないといったものが挙げられる。

ちなみに人体に必要以上の魔力が注がれてしまえば、ＤＲＥＳＳと融合してしまいＤＲＥＳＳを脱ぐことが不可能になる。　結構一大事。

「まず、これが広まってしまえば使い魔の存在意義が危うい。　魔法少女と使い魔が必要以上の関係を結んでしまえば、どこで裏切りが発生するか私の管轄では把握できなくなってしまう。

次に魔法少女達だ、今は二着だが、これが三着、四着と数が増え魔力を注ぎ続けてしまえば、現代の魔女が誕生してしまい我々では手がつけられなくなってしまう。　我々の目的である魔法少女をご当地アイドルにして地域活性化を促し、社長が望んでおられるＭＧＡ４８計画も――」

「・・・・　取締役、お話中申し訳ないんだけど、その話初耳なんですが・・・・　？」

おずおずと手を挙げたのはチェシャ猫である。　使い魔の中でも新参の彼としては何か取締役がおかしなことを言っているようにしか聞こえなかった、ていうか何気に社長も関わっての大型プロジェクトのようにも聞こえる。

「おいおいチェシャ坊、お前さん何も聞いてなかったのか？　おふざけ路線目指してるこの世界で魔法少女同士がドンパチやるシリアスパートがあるとでも思ったのか、紳士たる私がパンツを被ってるんだぞ」
「い、いや、そういうわけじゃないけど……」
「――――ならば、仕方ありませんわね！　妾のユウキはそろそろ魔法少女としても、MGAメンバー候補としても申し分ありませんわ！　取締役、ここはどうぞ一考してくださいまし！」
「高飛車姫は黙ってろ、私はツバキを推させてもらおう！　最近魔法少女になったが、彼女には可能性がある！　まだまだ未知の可能性だ、その可能性が日本を、いや、ゆくゆくは世界を救うことになるだろう！」
「それならば――――」「では、拙者は――――」「そういうことなら――――」「ならば私は――――」「で、あるならば――――」「そういう話ならさぁ――――」
　赤のお転婆姫を筆頭に、使い魔達が自らのパートナーたる魔法少女達をこれ見よがしに売り出し始める。
　林道取締役、及び林道Pはかの聖人聖徳太子の伝説の一つである十人の会話を一度に聞き分けるを実行し、それぞれの長所、短所、そして個性をどこからか取り出したルーズリーフに纏め始める。

チェシャ猫は突然の事態についていけない、ていうか魔法少女ってそういう存在だったっけ？　と思案しながら入社した頃に配られた使い魔マニュアルを読み直す必要が出てきた。

まさか、あれをまともに確認しなければならない日がやってくるとは。

一通りメモをした林道取締役の姿を確認した帽子屋がパン、パンと会議室全体に響く音で手を二度叩く。

「諸君らの言い分、担当魔法少女の長所短所はよくわかった。　だが、ワンダーランドの規約に従い、ＡＬＩＣＥ―ＴＹＰＥの適合者を優先して、センターに迎えたいと考えている」

――――反対意見はなかった。

さっきまで反抗的な意思を示していた赤のお転婆姫からの反論もない。

誰も彼もが仕方ない、それが取り決めなのだから当然、といった様子で押し黙っていた。

「我が社の設立から早２０年、苦労の日々からここまでの大企業へと進出することができたのも表の仕事の者達の活躍はもちろん、裏の顔である君たちの活躍があったからこそだ。　ある日私が魔女の声を聞き、魔女の存在を知り魔導への研究へと足を踏み入れ賛同者や学者に協力を募り様々な技術者とのコネクションを作った他幾たびもの失敗

を重ねに重ねて尊い犠牲も数知れずとも今日ここまで歩んでこれた我々の研究は実を結び世間にも公表した後に社長の悲願日本という国に希望を与えるべくしてボランティアを行うためにも資金が必要でありうまくいけば世界進出も夢ではなく最近話題になりつつある仮想通貨による商売に我々も着手し更なるメディアへの進出も行うことで世間にもっと我々の行うことをアピールすることで魔法少女のテレビ番組出演や総選挙じゃんけん大会他あの秋〇康をも越える規模のプロデュースを行いつつ問題とされる魔女の再来を避けるためにも魔力は我々が管理する必要が――――」

「――――取締役、長いです長いです。　皆さん次々とお帰りになられてます」

林道取締役と帽子屋ナキ、この二人だけが会議室に残された。

使い魔は勝手に出て行ったり、帽子屋に一言声をかけて帰ったものの二パターンに区分された。

中には机にダイイングメッセージを残して帰ったものもいる。　怖いわ。

「‥‥　君との付き合いも長いものだな、帽子屋」

「何を五年ちょっとの付き合いで、僕の目的のためにもこれからもよろしく頼みますよ」

「あぁ、こちらこそよろしく頼むよ」

帽子屋は不敵な笑みを浮かべて会議室の扉を開き、蛍光灯が不気味に点滅する廊下へと吸い込まれるようにして消えていった。

会議室の扉はギィ、と音を立て静かに閉じられた。

※

カニ祭が終わり一ヶ月が過ぎた。

この一ヶ月の間うちの苦労は計り知れない、いや、自分で言うのもどうかと思うんだけど、あちこち走り回ってたからそれくらいは言わせて欲しい。

あの三竹の持ってきた際どい童貞殺し（ウブオブレイカー）なるゴスロリ服を着たうちの写真が千梅の馬鹿によって予想以上に広がってしまったのだ。

ヤフ〇クやらメ〇カリで見かけた時には本気であの馬鹿を我が家に監禁してやろうかと考えた。

不本意ながら魔法少女の能力を使ったり、地道に写真の流通を可能な限り防いだり、千梅の馬鹿の奇行を止めたりとこの一ヶ月の八割はそれで潰れた。

割と厄介だったのが、同居人の変態だ。

――というわけでうちは疲れてるので授業は申し訳ないが、睡眠時間とさせてもらう。

帰ってちゃんと復習するから、お願いセージ！　今日だけは見逃して！

「なんていうか、ツバキも三竹みたいになってるねー。　あれ、疲れ果ててる目してる

！」
「誰のせいだと思ってんのよ」
　もう目の前の馬鹿、千梅にアイアンクローをくらわせる気も起きなかった。
「そんなツバキちゃんに朗報！　千梅ちゃん情報局出張放送のお時間です!!」
「寝る」
「まぁまぁ、そう言わずに――――」
「寝る」
「いや、あの、せめて話を聞くだけ、ていうか、フリだけでもいいから――――」
「寝る」
「うわーん！」
　うー、本当に勘弁してほしい。　これ以上友人に恨みを抱きたくもないし、疲れがドッと来るのも勘弁してほしい。
【上手に焼けましたー！　固有結界、睡眠無効が取得可能になりました】
　また、頭の中に魔女の声が響く。　これ結構頭ガンガンするから勘弁してほしい。
　二日酔いの感覚に似てるから本当にヤダ。
「……　ね、ねぇツバキちゃんホントに大丈夫？」
「だいじょばない」

顔色でも悪かったのだろうか、あの千梅が恐る恐る聞いてくるなんて珍しいこともあるもんだ。　いつもグイグイと人のプライバシーがなんだという勢いでやってくるのに、なんだからしくない気がする。

「あれ、保健室行く？　今の時間なら先生コーヒー飲みながら小説を読み漁ってる時間だと思うよ」

「……　行く」

「肩、貸そうか？」

「うん」

元々こいつが原因でこんなに疲れてるんだ。　少しくらいはうちのために働いてもらっても何の問題もないし、怒られもしないはずだ。

※

千梅は彼氏を必要としない。

イケメンは好きだが、特定の男子と付き合いたいという願望はない。

姉貴分の居候、桜とは踏み込むところまで踏み込んだ、というか踏み込まさせられた。

そうなる以前から千梅の本質はレズビアンである。　中学の頃からツバキに性的に惚れており、隙を見つけ次第、ひたすらアタックを続けている。

片想いをし続け始め、もう早二年になろうとしてる。　キッカケは思い出せない、きっと一目惚れだったんだろうなと思う。
恋敵である彼女の従兄弟である唐吉のことをここ校舎内では十分に出し抜ける。
「失礼しまーす」
「はいはい、あ、なんだ、千梅ちゃんか」
「そんな露骨にガッカリせんでも」
「だって運動部のイケメンじゃないじゃん、汗かいて怪我したイケメンじゃないじゃん」
保健室の扉を開き、白衣を着た保健担当の妙齢教師は白衣を羽織り直す。
机の上には千梅の予想通りというかなんというか、タイトルからして薔薇な雰囲気の漂うBとLなジャンルに分類される小説が目測十冊ほどが丁寧に塔のように重ねられてた。
「ツバキちゃんの体調悪いみたいなんで、ベッド借りますよ」
「はいはい、ご自由に使って頂戴な。　診断書は書いとくから」
保健室の先生はやれやれ、といった様子で本を閉じてペンを手に取る。
なんだかんだでこういう仕事はきちんとしてくれるので憎むに憎めない、一部の男子生徒からの人気もある。
千梅は椿を寝かせ、布団をかける。　もう秋も終わり頃、冬に近づいているため気温

も下がり始めている。
この恋に近いうちにケジメをつける必要がある。
片想いが実るのは三年目、どこかの誰かが言っていた。　シェイクスピアだとかルイス・キャロルあたりだったかもしれない。
あまりロマンチックな展開は好きでない千梅だが、この好きな人といられる時間だけは大切にしたいと、心の中で想いをひっそりと忍ばせていた。
「‥‥　いや、あんた授業行きなさいよ」
「しゅーん」

9．ちゃかい

12月になった。

街はイルミネーションで彩られており、すっかりクリスマス気分である。

まだ二週間も先のことだというのに、どうやら日本という国はイベントには変に全力なところがあるらしい。

唐邦高校は創立記念日で休み、その休みを利用してツバキと楓の二人はデートしていた。　そう、文字通りデートである。

「楓さん、彼氏のこと放っといてウチと出かけることデートとか言っちゃっていいんですか？」

「いいのいいの！　どうせあいつ怒らないし！」

（生徒会長、怖ええ）

楽しそうに街路樹の真ん中を歩く楓の隣を歩きながら、ツバキが息を一つ漏らす。

白く曇った溜息が寒さと冬の訪れを示していた。

「寒いわねぇ、早いとこどこかに入っちゃいましょ」

「っすね」

二人は手頃な喫茶店を見つけると、寒さから避難するように急ぎ足で店の中へと入る。　平日の昼前という時間帯であったのが幸いし、席は容易に確保することができた。

「あー、あったかい！」

「本当ねぇ、サクラさんにもここにいるってこと連絡しとくね！」

「……　楓さん、いつの間にサクラさんとそんなに仲良くなってたんですか？」

「いやぁ、色々あってね」

今日、三人で集まろうと言い出したのは楓だ。　ツバキはサクラを呼ぶということを知ったのはついさっきだが。

楓曰く、使い魔であるチェシャ猫が用で出かけてしまったらしい。　ツバキとサクラの使い魔達も同様だ。

ならばと魔法少女同士集まって一度話をしようということになったのだ。

「それにしても、うちのウサギはともかくとして、楓さんとこのあいつがいないって珍しいですね」

「そうねぇ。　チェシャ猫と出会ってからはよく一緒にいたわねぇ、お風呂とトイレ以外」

「……　それは普通です」

オシャレなジャズ音楽の流れる店内にいるだけで優越感に浸れるのは外が寒いからだろう。

ツバキはホットココアを、楓はアイスコーヒーを飲みながらサクラの到着を待つ。

―２０分くらい経った頃に全身ずぶ濡れになったサクラが到着し、ツバキが話を切り出した。

「そもそも、魔法少女って何なんですか?」

「あまり考えたことなかったけど、たしかにおかしな現象よね。　魔法が使えるようになるなんて」

「お願いします、少しは疑問を持ってください」

サクラの注文したドラゴンソーダが届いたところで口を開く。

「―文明の復興、ナキはそう言ってた」

「……　文明?」

「ナキって誰?」

「私が、ハンプティパンティと会ったのは四年前くらい。　下着を、寄越せと言ってきた」

「セクハラじゃん」

「ステッキを、もらって変身したら、スカートの中に潜り込んできた」

「セクハラじゃん!?」
「それからというもの、毎日パンツを一枚盗まれてる」
「サクラさんいい加減怒ってください！　立派な犯罪ですから、それ!!」
使い魔が法廷の場で裁かれるのかは別として、ハンプティパンティの暴挙は許されるものではなかった。　いつか出会う日が来るようなものならブラッディフェスティバルにしてやろうと拳に誓ったツバキであった。
「でも、利害は一致した。　だから、私は魔法少女になった」
「チェシャ猫はそんなこと全然教えてくれなかったなぁ。　ただ、魔女を見つけるためには魔法少女になる必要があるとかないとか」
「・・・・　ツバキ？　は何も聞いてないの？」
「そもそもウチはあのウサギとあまり話さないので」
「もー、仲良くしなよ」
好きで一緒に暮らしてるわけでもなければ、契約も半ば強引であった。　それなのに仲良くしなければならないとか、無茶振りにも程がある。
ツバキは追加注文したパンケーキを食べながら、魔法少女の先輩方に色々と質問を投げかける。
「お二人共の覚えた魔法ってどのくらいあるんですか？」

「あら、それを堂々と聞くのね？」
「タブーでした？」
「いえ、全然。　でもあまりいい気分をしない人もいるんじゃないかしら？」
　それを一々気にしては聞くものも聞けないので忘れることにする。
「私はそうね、ステッキに登録されてるのは１４６種ね」
「え、そんなの見れるんですか？」
「見れ、る」
　どうやらステッキにはまだまだ知らない機能が多いようだ。
「‥‥　これ、魔法っていうよりも科学技術に頼ってるような気が」
「そう、これは、行き過ぎた、科学技術」
　髪についた汚れをウォレットティッシュで落としながらサクラが応える。
「―ハンプティパンティ、言ってた。　魔法少女の魔法は、全部、科学で説明のつくもの」
　このことに驚いたのはツバキと楓だった。
「そ、それが本当だとしたらノーベ〇賞ものの快挙に私ら立ち会ってる、ってことになるわね」
「世間には公表、してない。　これは私営的、実験段階」
「‥‥　つまり、私達魔法少女は、その科学技術の精度を試すための、実験体ってわけね」

とどのつまり、魔法少女という存在はそういうものなのだ。
公的に発表できる存在でなく、あくまでも噂話程度。　所謂都市伝説といったフワフワした存在。
そんな彼女たちに未知のテクノロジーの実験となってもらうには丁度いい。
魔法少女、と銘を打っているが所詮はモルモットと変わりない。
「なら、使い魔は一体何？　あのウサギ達は一体どういう存在なの？」
「ハンプティパンティは、ギルティ」
「それは承知の上ですよ、サクラさん。　うちのウサギはともかく、そちらさんのは完全にギルティです」
そう、全てが科学で説明できると言われてもあの使い魔達もそうなのだろうか。
いくら科学が行き過ぎたとしていても本当に今考え得る技術であそこまで、ましてやよくわからない生物を産み出すだけのオーバーテクノロジーが存在するのだろうか。
「ん～」
「楓さん、どうしたんですか？」
「いや、なんだか使い魔。　彼らは何か魔法とかの類とは違う気がするのよねぇ」
「……　その、心は？」
「―チェシャ猫は昔行方不明になった叔父なのよ」

※

使い魔とはとても不可解な存在である。

まさか我が身にもこのような災厄がもたらされることになろうとは、チェシャ猫本人も思っていなかったことである。

―株式会社ワンダーランド。

チェシャ猫を含む、各地に散った魔法少女の使い魔達が一同に会するこの場で彼は身を潜め、言動に細心の注意を払う。

「やれやれ、この間お茶会はあったばかりだと言うのに、こう不定期に呼ばれては身が持ちませんね」

この場で唯一の人間であるナキが溜息を洩らす。　チェシャ猫にとってこの男も用心すべき存在であった。

「全くだ。　もう報告すべきことは一度した、これ以上話すことがあるものなのか」

「そこは取締役の意向に従うしかないでしょうな。　僕とて忙しい身だ」

「―そこ静粛に。　そろそろ取締役がお見えになりますわよ」

「ふっ、まさかあんたにそういう注意をされるとは思わなかったよ」

「お黙りなんし」

チェシャ猫は自分に小言を言ってきた人型の使い魔、赤のお転婆姫の言葉に従う。同じ使い魔であるというのに人型であったり、獣型であったりと随分様変わりするものだ。

こういったところも使い魔のよくわからない部分である、おそらくマニュアルにも記されていない。

「―お待ちしてました、林道取締役」

「あぁ、すまんな帽子屋」

「‥‥‥ あの、だ、大丈夫ですか？」

「問題ない！」

扉の向こうからやって来た林道取締役の姿はとてもくたびれていた。

隈はいつもより深く、スーツもアイロンをする暇もなかったのかと思うくらいしわくちゃ、チェシャ猫が見てもわかるくらい疲れが表に滲み出ていた。

「と、取締役‥‥‥ ？ ほ、本日はお休みになった方が―」

「そういうわけにもいかんのだ」

「まぁまぁ、一先ず取り立てのパンツはいかがですか？」

「いただこう」

ハンプティパンティの渡したパンツを頭から被り、いつもの席に座る。

刑事であるナキより多忙な様子であることは見てわかるが、赤のお転婆姫は憐れみの視線を向けていた。

「‥‥　えー、諸君に集まってもらったのは他でもない。　先日、とある高校で行われた文化祭についてだ」

―どうやら、林道取締役の過労の原因はチェシャ猫にも関わってしまっているようだ。

他にも心当たりのある使い魔二体がわかりやすい反応をしている。

「いや、魔法少女が有名になることはありがたいんだけどね。　いきなりあんな人目の付く舞台で歌って踊られるとね、こっちも、色々と問い合わせの応対とか、質問とかもね。　こう、来るじゃない。　それで、始末書とかも書く羽目になってね、いや、悪いことじゃないんだけど、せめて事前に言ってくれてたら、こっちも心構えというものが―」

だらだらだらだらと滝のような汗を流す三体の使い魔。

ナキは林道取締役に視線を向けるでもなく、誰の方を見ることもなくただ宙を眺めている。

「―けど、前進があった」

林道取締役が言いたいことを言うだけ言った後にＡ４サイズのファイルを取り出し

た。
ナキがファイルをそれぞれの前に設置していく、もちろんチェシャ猫の前にも置かれる。
「各自、資料が届いたら簡単に読んでくれ。　そこから詳細を説明する」
備え付けのティーカップを手に取り、チェシャ猫は配られた資料に目を通す。
（―これは）
―そこに記された内容、それはＭＧＡ４８計画の核心とも言えるような文字が羅列されていた。
しかし、それだけではない。
「取締役！　これは、これでは一体今までのことは、どうなるんですか!?」
「何も問題ない。　同時進行だ」
「しかし、これでは魔法が世に明るみに出てしまいます！　魔女の遺産が世に知らされる結果となってしまいますよ!?　取締役！」
白馬の王子は必死に抗議する。　それは当然のことだ。
これまで魔法というものの存在については世間では秘匿とされてきていた、ノーベ○賞にノミネートされない理由の一つでもある。
魔法は世界、いや、日本の一部の重鎮にしか知られない禁じられた技術。

イギリスへ特許申請を済ませ、世間一般に公表しないことで研究、発展に協力しているのだ。
それらを無視するようなことが配布された資料に書かれていたのだ、抗議の声も当然ある。　国際問題にも発展しかねない事態だ。
「魔法の存在が明るみに出ることは今更として、取締役。　魔女はどうするつもりだ？　社の方針もともかくとして、貴方の本懐であるはずだ」
チェシャ猫の向かいに座る影武者ＫＡＭＥが尋ねる。
「魔女なら目星がついた、もう捜索班の半分は撤収作業にあたってる」
「！」
―瞬間、目を見開いたのは帽子屋と呼ばれるこの場で使い魔ではない刑事のナキだった。
（・・・・　これ、国際問題に発展したら僕の仕事が増えるやつなんじゃない？）
―魔女の目星がついた。
ナキにとってはこれ以上ない吉報であった。
※
【たらったらったったん、たん！　リンス魔法を習得しました】

「どこで使うんだよ!?」
「ツバキ、どうした、の?」
魔女の声がツバキの脳に響き渡る。
時間は午後六時を回り、ツバキとサクラは帰路についている。　楓とは帰る方向が反対だったので既に別れている。
ところでリンス魔法、一体どこで使う場所があるというのだろうか。
「それで、ツバキ。　カエデの話どう思う?」
「……　わからねぇっす」
『―私は使い魔が人間だったと考えてる。　まだチェシャ猫には勘付かれてないと思うけど、このことは特に使い魔に悟られないように』
「……　でも、たしかにそれなら、ハンプティパンティが、パンツを求めてる理由も、わかる」
「わからないでください」
「わかった」
沈んだ太陽を見送り、ビルとビルの合間を縫うように二人は夜の街を歩く。
「もし、楓さんの考えが当たってるとして問題は方法ですね」
「おそらく、魔法」

「ですね」
ツバキ達の身に降りかかってる未知のオーバーテクノロジー。
魔法による作用がどこまでの常識を覆すのか、ツバキ達はまだ知る由もない。
「……　少し調べないといけないですね」
「……　私も、頑張る」
決意を表明したところでサクラの姿が消えた。
道端のゴミ袋に足を引っ掛け、電柱に頭をぶつけて路地裏にまで転がっていってしまったので、ツバキの隣から消えたように見えたのだ。
―三日月の夜、二人の後を追う一つの影があったとかなかったとか。